杉谷１番塚古墳

－ 第２次調査報告書 －

２０２１年３月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷１番塚古墳

－ 第２次調査報告書 －

２０２１年３月

富山大学人文学部考古学研究室

杉谷1番塚古墳 ― 第2次調査報告書 ―

二〇二一年 三月 富山大学人文学部考古学研究室

杉谷１番塚古墳

－ 第２次調査報告書 －

２０２１年３月

富山大学人文学部考古学研究室

例　言

1．本書は、富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）が、令和元（2019）年度に実施した、富山県富山市杉谷2630（富山大学杉谷キャンパス内）に所在する杉谷1番塚古墳における第2次調査の成果報告である。

2．杉谷古墳群内の古墳名称は、遺跡台帳の登録では杉谷4号古墳などとなっているが、本書では杉谷4号墳などとする。なお、1番塚古墳と2番塚古墳、3番塚古墳については、このままとする。

3．調査は、富山大学人文学部考古学研究室の構成員が中心となり実施した。

4．本書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（1998年版）である。

5．本書で用いた座標は、国土座標第Ⅶ系（世界測地系）に基づくものであり、南北をX軸、東西をY軸として示した。方位は真北、水平基準は海抜である。

6．本文の執筆、遺構・遺物の実測及び製図、写真図版作成は、髙橋浩二（富山大学人文学部教授）と尾関さゆり、小山翔大、坂本美宥、下祐一朗、関杏介、永田峻一郎（以上、富山大学人文学部学生）が中心となって行った。執筆分担等は目次及び各項目の末尾に記すとおりである。

7．「杉谷古墳群の立地と周辺の古墳・遺跡」については、すでにまとめたことがあるので本書では省略した。詳しくは、富山大学人文学部考古学研究室2020『杉谷1番塚古墳－第1次調査報告書－』を参照されたい。

8．写真撮影は、髙橋が行った。

9．出土遺物、調査図面及び写真等は、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。

10．調査及び報告書の作成にあたっては、藤田富士夫氏、岡田一広氏、鹿島昌也氏、細辻嘉門氏、富山市教育委員会からご教示ならびにご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

11．本書の編集は、髙橋が行った。

12．本書は、令和元年度及び令和2年度富山大学人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系教育支援経費）の活動成果を含むものである。

杉谷１番塚古墳　第２次調査報告書

目　次

例　言
第１章　調査経過
　１　調査に至る経緯 …… 髙橋浩二 ……　1
　２　調査経過と調査組織 …… 小山翔大・髙橋浩二 ……　2
第２章　既往の調査・研究
　１　富山市教育委員会による調査の成果 …… 峯村海生・髙橋浩二 ……　7
　２　杉谷１番塚古墳の築造時期に関する見解の変遷 …… 坂本美宥・髙橋浩二 …… 10
　３　富山大学人文学部考古学研究室による第１次調査の成果 …… 髙橋浩二 …… 13
第３章　発掘調査の成果
　１　測量基準点 …… 髙橋浩二 …… 17
　２　調査成果
　（1）調査の目的と調査区の設定 …… 永田峻一郎・髙橋浩二 …… 17
　（2）第１調査区 …… 尾関さゆり・小山翔大・関杏介・髙橋浩二 …… 20
　（3）第２調査区 …… 永田峻一郎・髙橋浩二 …… 24
第４章　出土遺物
　…… 尾関さゆり・小山翔大・坂本美宥・下祐一朗・関杏介・永田峻一郎・髙橋浩二 …… 29
第５章　まとめ …… 髙橋浩二 …… 33
図　版
抄　録

図 版 目 次

写真図版 1　1　第 1 調査区設定状況（北東から）
2　第 1 調査区完掘状況（北東から）
3　第 1 調査区東壁断面（北西から）
写真図版 2　4　第 1 調査区東壁南側断面（北西から）
5　第 1 調査区東壁断面墳裾部分拡大（北西から）
6　第 1 調査区南壁断面（北東から）
7　第 1 調査区西壁断面（南東から）
8　第 1 調査区旧表土検出状況（北東から）
9　第 1 調査区周溝底部ピット状遺構（北東から）
10　第 1 調査区蓋出土状況（北東から、第 10 図 18）
11　第 1 調査区須恵器出土状況（南西から、第 10 図 19）
写真図版 3　12　第 2 調査区設定状況（北西から）
13　第 2 調査区完掘状況（北西から）
14　第 2 調査区北壁断面（西から）
写真図版 4　15　第 2 調査区北壁断面墳裾部分拡大（南西から）
16　第 2 調査区拡張区北壁断面（西から）
17　第 2 調査区拡張区東壁断面（北西から）
18　第 2 調査区甕出土状況（北から、第 10 図 1）
19　第 2 調査区器台脚部出土状況（北西から、第 10 図 11）
写真図版 5　20　出土遺物

挿図目次

第 1 図　第 2 次発掘調査参加者 …… 4
第 2 図　杉谷 1 番塚古墳測量図・トレンチ配置図（富山市教育委員会 1974 掲載図の縮尺を 1/400 に改変）［峯村海生・髙橋浩二　作成］…… 8
第 3 図　土層断面図（富山市教育委員会 1974 掲載図の縮尺を 1/50 に改変）［峯村海生　作成］…… 9
第 4 図　藤田・駒見による墳墓様式の変遷図（藤田・駒見 1981）…… 11
第 5 図　杉谷 1 番塚古墳墳丘測量図［峯村海生　作成］…… 14
第 6 図　測量基準点配置図［株式会社エイ・テック　作成］…… 18
第 7 図　調査区配置図［関杏介・永田峻一郎　作成］…… 19
第 8 図　第 1 調査区平面図・断面図［尾関さゆり　作成］…… 22
第 9 図　第 2 調査区平面図・断面図［下祐一朗　作成］…… 26
第 10 図　出土遺物［尾関さゆり・小山翔大・坂本美宥・下祐一朗・関杏介・永田峻一郎作成］…… 31
第 11 図　杉谷 1 番塚古墳遺構全体図［峯村海生・関杏介　作成］…… 34

表目次

第 1 表　杉谷 1 番塚古墳第 2 次調査の作業経過［小山翔大　作成］…… 5
第 2 表　北陸の編年（吉岡 1978）と諸氏による編年（藤田・駒見 1981）…… 11
第 3 表　測量基準点一覧［峯村海生・髙橋浩二 作成］…… 17

第1章　調査経過

1. 調査に至る経緯

杉谷古墳群は、富山県を東西に二分する呉羽丘陵の南西端に発達した標高60～70mの杉谷丘陵（友坂段丘）において、富山平野を望む丘陵頂部平坦面の南から東縁辺に沿って築かれた、11基の墳墓からなる古墳群である。

この古墳群の内容が明らかになったのは、1974（昭和49）年に富山市教育委員会が実施した確認調査の成果による[1]。1番塚古墳、2番塚古墳、3番塚古墳、4号墳、5号墳、6号墳、7号墳についてトレンチ調査が行われ、墳形や規模等の確認がなされた。とりわけ4号墳については、その墳形が当時島根県下でのみ確認され、山陰地方の限られた地域に特徴的な弥生墓制である「四隅突出型」とされたことから全国的な注目を集めた。

その後、杉谷丘陵には国立富山医科薬科大学の新設計画がすすめられたが、古墳群そのものは学術的な価値からも建設予定地から除外されるとともに、県有地として保存されることとなった[2]。2004（平成16）年には、国立大学法人法の施行を受けて、県内に所在する3つの国立大学（富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学）が統合され、翌年10月に新富山大学（富山医科薬科大学は医学部と薬学部、高岡短期大学は芸術文化学部）が発足した。この統合に伴い、県有地であった古墳群の土地は大学に移管され、富山大学による所有、管理のもとで現在に至っている。

富山大学では、杉谷古墳群がキャンパス内に所在する貴重な歴史的遺産であるという認識から、学術研究の対象とすること、遺跡そのものを広く公開すること、地元の方々が取り組んだ杉谷古墳群顕彰事業[3]の熱意を受け継ぐこと、さらに古墳群の内容を明らかにするための新たな発掘調査の必要性などの観点から、現状の維持管理ならびに文化財としての保存、活用についての検討が行われた。

人文学部考古学研究室では、以前から富山県を中心とした「北陸地方における古墳出現過程の研究」を研究テーマのひとつとして取り組んできたことから、弥生時代墳墓との関連性を色濃くとどめる杉谷古墳群が、研究と教育の両面において好適なフィールドになるものと判断した。そこで、平成21年度に3ヵ年にわたる杉谷古墳群の発掘調査を計画し、関係機関との調整を行った。幸いにも地元の方々ならびに関係各位の理解と協力が得られるところとなり、調査の実施に至ることとなった[4]。

第1年次（平成22年度）と第2年次（平成23年度）は、杉谷6号墳を対象に測量調査及び墳丘の発掘調査を実施した[5]。そして、第3年次（平成24年度）は調査対象を4号墳に移し、東側突出部の発掘調査（第1次）を実施した[6]。

平成25年度には杉谷古墳群に対する調査継続の方針を確認し、あらたに7ヵ年の調査計画を策定した。計画は本学役員会において了承され、第1年次（平成25年度）は、杉谷4号墳を対象に南側突出部の実態の解明を目的として第2次調査を実施した[7]。以降、第3次調査を南側突出部の補足調査ならびに西側突出部の解明を目的に実施[8]、第4次調査を墳丘斜面の実態の解明を目的に東側墳丘隅方向及び墳丘北東辺中央部において実施[9]、第5次調査を富山市旧トレンチの位置確認、墳頂部の構築状況や墓壙及び埋葬施設の確認等を目的に墳頂部平坦面において実

施[10]、第6次調査を引き続き墳頂部平坦面において行うとともに、西側突出部の遺存状況の確認を目的に実施した。また、第6次調査では杉谷7号墳を対象に墳裾部や周溝の確認などを目的として発掘を実施した[11]。

第6年次にあたる平成30年度からは、調査計画にもとづき対象を杉谷1番塚古墳に移し、測量調査を実施した[12]。そして、第7年次にあたる今回の調査では、杉谷1番塚古墳の後方部において初めて発掘調査を行うこととし、令和元（2019）年6月28日付けで、文化財保護法第92条第1項の規定にもとづく埋蔵文化財発掘調査届を富山市埋蔵文化財センター経由で富山県教育委員会に提出、同年7月28日より調査を開始した。現地調査の終了は9月2日である。

調査にあたっては、富山大学人文学部ならびに杉谷キャンパスの教職員の方々にさまざまなかたちでご協力いただいた。地元の方々、そして関係各機関とあわせてここに感謝の意を表する。（髙橋浩二）

2. 調査経過と調査組織

今回の調査では、杉谷1番塚古墳の後方部北東側と北西側の2箇所において、周溝の存在を確認すること、また墳裾部を確認することで古墳の正確な規模を明らかにするための手がかりを得ること、そして築造時期決定の材料とするための土器資料を得ることなどを目的として発掘調査を実施した。調査期間は2019年7月28日～9月2日である。調査経過は次の通りである。（髙橋浩二）

初日の7月28日は、調査予定地の清掃を行った後、調査区ごとに分かれて作業を開始した。第1調査区では、トータルステーションを用いて、付近の測量基準点を確認した後、長さ4.0m、幅2.0mの調査区を設定した。第2調査区でも同様に、トータルステーションを用いて付近の測量基準点を確認した後、調査区設定に取り掛かった。

8月4日は、両調査区において発掘前写真撮影を行った。その後、第1調査区では、表土の掘り下げを開始した。第2調査区では、長さ4.0m、幅1.5mの調査区を設定した後、表土の掘り下げを開始した。

8月5日は、第1調査区では、灰黄褐色砂質土の表土（第1層）と黒色砂質土（第2層）の違いが明らかになった。第2調査区では、引き続き掘り下げを行い、黒褐色砂質土（第3層）を確認した。

8月6日は、第1調査区では、調査区中央より東半部を幅1.0mのサブトレンチとして設定し掘り下げたところ、1㎜の橙色土粒を1%含む黒色砂質土(第3層)を確認した。第2調査区では、調査区北東側で、黒色砂質土（第4層）を確認した。

8月8日は、第1調査区では、調査区南東側において、2㎜のにぶい赤褐色土粒を2%含む黒色粘質土（第19層）を確認した。第2調査区では、深さ約0.4mの位置で全体を精査したところ、1㎜以下の明褐色土粒を1%含む黒褐色粘質土（第5層）と1㎜の明褐色土粒を1%含む黒褐色粘質土（第8層）及び1㎜の明褐色土粒を2%含む黒褐色粘質土第9層を確認した。

8月9日は、第1調査区では、調査区北東端から約3.7mまでの範囲で、1㎜以下の橙色土粒を1%未満含む黒褐色砂質土（第4層）を確認した。第2調査区では、調査区中央より北半部を幅0.75mのサブトレンチとして設定した。その後、掘り下げを行い、1～2㎜の明褐色土粒を3%含む

暗褐色粘質土（第 10 層）を確認した。

8 月 10 日は、第 1 調査区では、調査区東側の深さ約 1.5m の地点において、にぶい黄褐色粘質土の地山（第Ⅱ層）を検出した。第 2 調査区では、調査区北東側の深さ 1.163m の地点において、褐色粘質土の地山（第Ⅰ層）を検出した。

8 月 11 日は、第 1 調査区では、東壁の分層に着手した。また、調査区北東側では未だ地山が確認されてない箇所を掘り下げた。第 2 調査区では、調査区北側のサブトレンチ全範囲で褐色粘質土の地山（第Ⅰ層）を検出した。また、調査区を南東側へ長さ 1.0m、幅 0.75m 拡張した。

8 月 12 日は、第 1 調査区では、引き続き東壁の分層を行った。それとともに、調査区北東側を掘り下げ、調査区南西端から 1.6 ～ 2.8m の範囲で地山（第Ⅱ層）を検出した。また、調査区西半部の掘り下げを開始した。第 2 調査区では、拡張区において地山の確認を目的に掘り下げを開始し、極暗褐色粘質土の旧表土（第 14 層）を検出した。

8 月 18 日は、第 1 調査区では、引き続き北東側の掘り下げを行い、調査区東半部の全範囲において地山（第Ⅱ層）を検出した。調査区西半部では周溝埋土の上層（第 4 層）まで掘り下げた。第 2 調査区では、引き続き拡張区を掘り下げ、地山（第Ⅰ層）を検出した。また、北壁の分層に着手した。

8 月 19 日は、第 1 調査区では、南壁の分層が終了した。また、引き続き東壁の分層を行った。調査区南西側は旧表土（第 20 層）の深さまで掘り下げた。第 2 調査区では、引き続き北壁の分層を行うとともに、平面図作成にも取り掛かった。

8 月 21 日は、第 1 調査区では、東壁の分層が終了した。また、西壁の分層に着手した。第 2 調査区では、引き続き北壁の分層を行った。

8 月 22 日は、第 1 調査区では、東壁の断面図作成を開始した。第 2 調査区では、引き続き北壁の分層を行った。また、午後 1 時から調査成果に関する記者発表を行った。

8 月 23 日は、第 1 調査区では、引き続き東壁の断面図作成を行った。第 2 調査区では、北壁の分層が終了し、断面図作成に着手した。

8 月 24 日は、午前 11 時から現地説明会を行った。その後、第 1 調査区では、引き続き東壁の断面図作成を行った。第 2 調査区では、引き続き北壁の断面図作成を行った。

8 月 25 日は、第 1 調査区では、東壁の断面図作成が終了した。また、西壁の分層を行った。第 2 調査区では、北壁の断面図作成が終了した。また、拡張区東壁の分層及び断面図作成が終了した。その後、完掘状況の写真撮影を行った。

8 月 26 日は、第 1 調査区では、完掘状況と周溝底面で確認されたピット状遺構の検出状況、東壁及び南壁断面の写真撮影を行った。また、南壁の断面図作成が終了した。西壁では分層が終了した後、断面図作成に着手した。第 2 調査区では、北壁断面の写真撮影を行った。また、平面図作成を行った。

8 月 27 日は、第 1 調査区では、西壁の断面図作成が終了した。また、ピット状遺構を半裁した後、断面図作成及び断面写真の撮影を行った。さらに、東壁と西壁において断面の写真撮影を行った。その後、平面図作成にも着手した。第 2 調査区では、北壁と拡張区東壁において、断面の写真撮影を行った。その後、拡張区東壁の断面図を修正した。また、平面図と断面図を合わせて確認・修正をした後、一部埋戻しを行った。

8月31日は、第1調査区では、平面図を修正した後、平面図と断面図を合わせて確認・修正を行った。その後、調査区西側を一部埋戻した。第2調査区では、拡張区東壁の断面図を修正した。その後、埋戻しが終了した。

9月1日は、第1調査区では、再度平面図の確認・修正を行い、その後、埋戻しが終了した。

9月2日は、機材の搬出を行い、これにて現地での作業が終了した。その後、大学へ持ち帰った機材の一部を洗浄した。

また、9月5日には、残りの機材の洗浄を行い、これにて全作業が完了した。

発掘調査の結果、両調査区において褐色粘質土の地山を掘り込んでつくられた周溝を確認した。この周溝は内側斜面の立ち上がりが急傾斜で、底部は平らになっている。今回の調査区において、深さは地表面から約1.2～1.4mを測る。また、両調査区の墳丘側で、褐色粘質土の地山の上に旧表土が残っていることを確認した。さらに、両調査区において墳裾部を確認し、このことは今後古墳の正確な規模を判断するための手がかりになるといえる。遺物は、甕や高杯、壺などを含む土器片が181点出土した。（小山翔大・髙橋浩二）

杉谷1番塚古墳第2次調査組織

調 査 主 体：富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）

調査代表者：髙橋浩二（富山大学人文学部教授）

調査参加者：峯村海生、尾関さゆり、小山翔大、坂本美宥、下祐一朗、関杏介、永田峻一郎、小島布由美、関口美南、橋本すず、星野佑稀、松浦悠太、水島りさ子（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）
前田真央（富山大学人文学部1年生）

第1図　第2次調査参加者

第 1 表　杉谷 1 番塚古墳第 1 次調査の作業経過

	全体	第 1 調査区	第 2 調査区
7/28	調査予定地清掃、基準点確認	調査区設定	調査区設定
8/3	コンテナハウス設置		
4		写真撮影、発掘開始	写真撮影、発掘開始
5	機材搬入、テント設営		
6			
7	休み		
8 ～ 10			
11			調査区拡張（南東）
12			
13 ～ 17	お盆休み		
18			
19			平面図作成
20	休み		
21	雨のため午後 1 時には作業終了		
22	午後 1 時から記者発表 雨のため午後 2 時半には作業終了	断面図作成（東壁）	
23			断面図作成（北壁）
24	午前 11 時から 1 時間半の間現地説明会		
25			断面図作成（北壁、拡張区東壁） 写真撮影（完掘状況）
26	雨のため午前中に作業終了	断面図作成（西壁、南壁） 写真撮影（完掘状況、ピット状遺構検出状況、東壁・南壁断面）	写真撮影（北壁断面）、平面図作成
27		断面図作成（西壁、ピット状遺構） 写真撮影（ピット状遺構断面、東壁・西 壁断面） 平面図作成	平面図及び断面図確認・修正 写真撮影（北壁、拡張区東壁断面） 埋戻し
28 ～ 30	雨のため中止		
31		平面図及び断面図確認・修正 埋戻し	断面図修正（拡張区東壁） 埋戻し
9/1	コンテナハウス搬出	平面図確認・修正、埋戻し	
2	機材搬出、機材洗浄		
5	機材洗浄		

▒ は作業期間を表す

注

⑴ 富山市教育委員会 1974 参照。

⑵ 藤田 2017 参照。

⑶ 古沢校下ふるさとづくり推進協議会 2009 参照。

⑷ 黒崎 2012 参照。

⑸ 富山大学人文学部考古学研究室 2012・2013 参照。

⑹ 富山大学人文学部考古学研究室 2014 参照。

⑺ 富山大学人文学部考古学研究室 2015a 参照。

⑻ 富山大学人文学部考古学研究室 2015b 参照。

⑼ 富山大学人文学部考古学研究室 2016 参照。

⑽ 富山大学人文学部考古学研究室 2017 参照。

⑾ 富山大学人文学部考古学研究室 2019 参照。

⑿ 富山大学人文学部考古学研究室 2020 参照。

文献

黒崎　直 2012「調査に至る経緯」『杉谷 6 号墳－第 1 次発掘調査報告書－』富山大学人文学部考古学研究室

富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』

富山大学人文学部考古学研究室 2012『杉谷 6 号墳－第 1 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2013『杉谷 6 号墳－第 2 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2014『杉谷 4 号墳－第 1 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2015a『杉谷 4 号墳－第 2 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2015b『杉谷 4 号墳－第 3 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2016『杉谷 4 号墳－第 4 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2017『杉谷 4 号墳－第 5 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2019『杉谷 4 号墳－第 6 次発掘調査報告書－』

富山大学人文学部考古学研究室 2020『杉谷 1 番塚古墳－第 1 次調査報告書－』

藤田富士夫 2017「呉羽山丘陵の古墳調査のころ－人･モノ･コトを振り返る－」『富山市考古資料館紀要』第 36 号、富山市考古資料館

古沢校下ふるさとづくり推進協議会 2009『海を越えての交流－杉谷 4 号墳と四隅突出墳－』「杉谷 4 号墳と四隅突出墳」出版事業編集委員会編

第2章　既往の調査・研究

1. 富山市教育委員会による調査の成果

1番塚古墳を含む杉谷古墳群は、1974年2月15日～3月31日に富山市教育委員会により、実体把握のための確認調査が実施され、その概要が報告書にまとめられた(1)。杉谷1番塚古墳の調査では前方部の北西側から南西側にかけてA～Dの4箇所にトレンチが、また前方部の墳頂平坦面にはEとして4箇所にグリッドが設定された（第2図)。後方部及びくびれ部には、トレンチやグリッドは設定されていない。発掘の結果、A～Dトレンチでは周溝が確認され、Eでは墳丘が盛土築成であることが判明した。富山市教育委員会が実施した杉谷1番塚古墳における調査成果の概要は次の通りである。

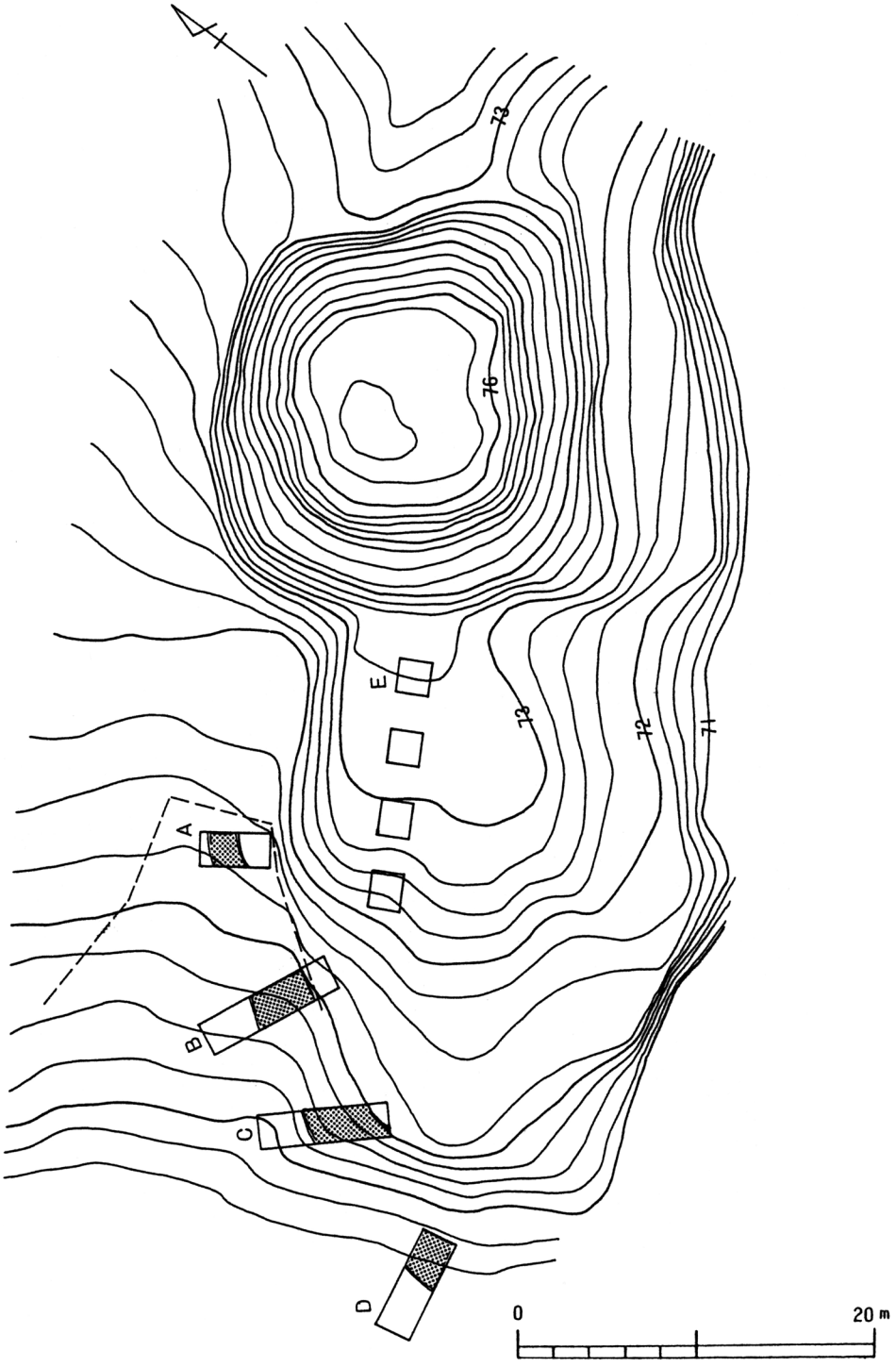
1. 墳形は前方後方墳的外形を示し、一辺が約21m×22mで、高さ3mの方墳部に、高さ1m位で若干くずれた形の張り出し状部が付随すると説明されている。このように、報告書では低平で不定形な形状を呈することから前方部と明言するのは避けられ、その関係から方墳部や方形墳という言葉が使われており、仮に前方部、後方部とするとしている。また、後方部は北東部がやや変形気味で、他はしっかりとしたマウンドを有するとされている。前方部を含めた全長は約56mを測るという。くびれ部についての記述はみられない。

2. 杉谷1番塚古墳のAトレンチは長さ約4.2m、幅約1.8mである。トレンチの深さは約0.6mである(2)。最上層には表土であるⅠ層（褐色耕作土）が堆積する。Ⅰ層は第3図の右側から左側にかけて厚くなり、厚さは右端で約0.15mであるのに対し、左端は約0.5mである。Ⅰ層の下には右側にⅢ層（黄褐色土〔柔らかい・粗粒子〕）が堆積する。Ⅲ層はトレンチの右端から中央よりの位置まで約1.5m続き、全体的に層の厚さは約0.15mである。トレンチの中央部から左側にかけてはⅣ層（黒色覆土〔細粒子〕）がⅠ層の下に堆積する。Ⅳ層は杉谷1番塚古墳の周溝埋土にあたる層である。この層は深さ0.5mで掘削が終了しているので、正確な厚さは不明である。なお、Aトレンチには他のトレンチと異なり、Ⅱ層（黒褐色土〔細粒子〕）が認められない。

Bトレンチは長さ約8.0m、幅約1.8mである。トレンチの深さは約0.5mである。Ⅰ層が約0.15mの厚さで堆積する。図の左側にはⅠ層の下に厚さ約0.15～0.2mのⅡ層が堆積する。その下に約0.1mの厚さでⅢ層が堆積する。トレンチ中央から右側には、Ⅰ層の下にⅣ層がⅡ・Ⅲ層を掘り込むようなかたちで堆積する。Ⅳ層は深さ0.3mの所で掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

Cトレンチは長さ約7.4m、幅約1.8mである。トレンチの深さは約0.6mである。Ⅰ層が図の左側から右側にかけて層の厚みを増すかたちで堆積する。トレンチ左側におけるⅠ層の厚さは約0.15mであるが、右側では厚さが0.3m以上になる。トレンチの左側ではⅠ層の下にⅡ層が堆積し、その下にⅢ層が堆積する。Ⅱ層は全体的な層の厚さが約0.2mである。トレンチの右側から中央部にかけては、Ⅰ層の下にⅣ層がⅡ・Ⅲ層を掘り込むようなかたちで堆積する。Ⅳ層は深さ0.4mで掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

Dトレンチは長さ約6.1m、幅約2.1mである。トレンチの深さは約0.5mである。Ⅰ層が約0.15mの厚さで堆積する。図の左側ではⅠ層の下にⅡ層が堆積し、その厚さは同じく約0.15mである。その下にはⅢ層が厚さ約0.1mで堆積する。Ⅳ層はⅡ・Ⅲ層を掘り込むようなかたちで堆積して

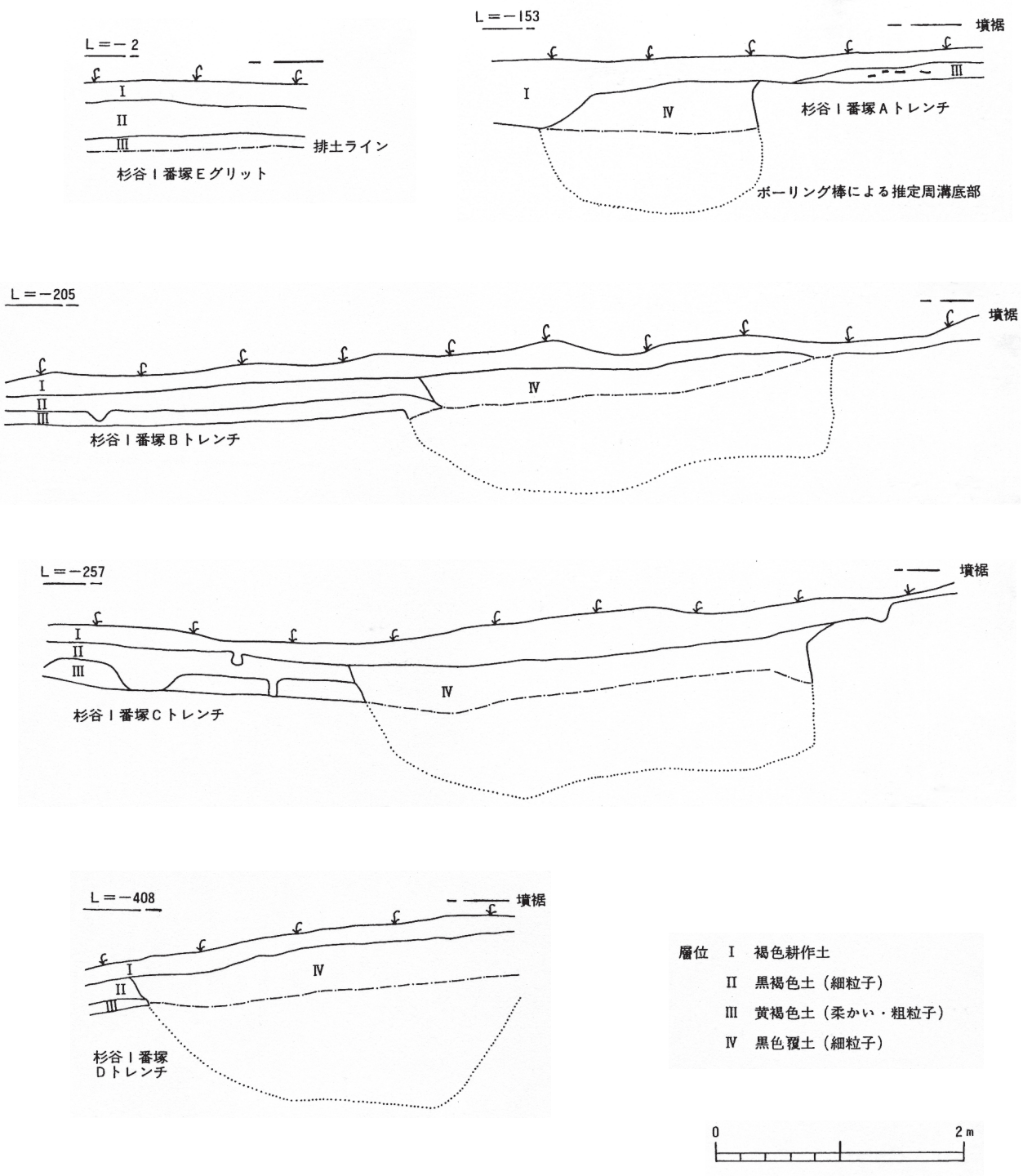


第 2 図　杉谷 1 番塚古墳測量図・トレンチ配置図（富山市教育委員会 1974 掲載図の縮尺を 1/400 に改変）

いる。Ⅳ層は深さ 0.4mの所で掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

Ｅグリッドはいずれも長さ約 1.8m、幅約 1.8mである。グリッドの深さは約 0.5mである。Ⅰ層の厚さは図の左側では約 0.15mであるが、右側では約 0.2mになり、層が左側から右側にかけて厚みを増すかたちで堆積している。Ⅰ層の下に約 0.25 ～ 0.3mの厚さでⅡ層が堆積する。その下にⅢ層が堆積する。Ⅲ層は深さ 0.1mの所で掘削が終了しているので正確な厚さは不明である。

3. Ｅグリッドを除くこれらのトレンチでは周溝が確認されている。周溝の幅は、Ａトレンチ



第３図　土層断面図（富山市教育委員会 1974 掲載図の縮尺を 1/50 に改変）

では 1.7m、Ｂトレンチでは 3.5m、Ｃトレンチでは 3.7m、Ｄトレンチでは最低 3mを測るといい、前方部末端になるに従い広くなる傾向があると指摘されている。富山市教育委員会が行ったボーリング調査によれば、周溝埋土のⅣ層上面から測った場合の周溝の深さは、Ａトレンチで約 1.1m、Ｂトレンチで約 1.0m、Ｃトレンチで約 1.1m、Ｄトレンチで約 1.4mとなる(3)。なお、報告書の記述では、ボーリング調査の結果、周溝はいずれも地山面より深さ 1m前後を示し、内側の立ち上がりはどれもが強く、ほぼ垂直をなすと推定されている。加えて、Ｃトレンチでは墳

丘ベースに呉羽火砕岩層が表出し、これが周溝によって切られているとされている。また一方で、これらの周溝が半円状にめぐる感があることから、前方後方墳としてはやや的確ではないという疑問点が挙げられている。

4. 出土遺物に関しては、A トレンチの墳裾部において地山より約 5㎝浮いて、内面にハケ状工具による整形痕をもつ古式土師器とされる甕形土器破片 20 点余が出土している。また、C トレンチ及び E の北グリットから縄文時代の石斧が出土している。

5. 古墳の築造時期については、A トレンチより出土した古式土師器などから、古墳時代初期に形成されたものと考えられている[4]。（峯村海生・髙橋浩二）

2. 杉谷 1 番塚古墳の築造時期に関する見解の変遷

1974 年、富山市教育委員会によって、杉谷 1 番塚古墳、2 番塚古墳、3 番塚古墳、4 号墳、5 号墳、6 号墳、7 号墳のトレンチ調査が行われ、墳形や規模等が確認された。また、1974 ～ 1975 年には、同教育委員会により、5 号墳と 7 号墳の間において杉谷 A 遺跡の調査が行われ、方形周溝墓 17 基と円形周溝墓 1 基、土壙 2 基が確認された。

杉谷 1 番塚古墳について、第 1 節で詳述したように、墳形は前方後方墳的外形を示し、一辺が約 21m × 22mで、高さ 3mの方墳部に、高さ 1m位で若干くずれた形の張り出し状部が付随すること、また築造時期に関して、出土した古式土師器などから、古墳時代初期に形成されたものであることが示されている[5]。

さらに、1975 年、調査担当者の藤田富士夫は別の論考の中で、杉谷 1 番塚古墳は、近隣に築造された畿内型の富山市勅使塚古墳や同市王塚古墳のような整美な前方後方墳に先行する在地的形態ともとれると論じている[6]。

また、杉谷 A 遺跡の周溝墓群との関係について、この墳墓群が築営されていたある時点で、杉谷 4 号墳をはじめ杉谷古墳群内の他の古墳の現出があり、ここに古墳時代初期の複雑な社会構造のあり方をみることができるとされている[7]。このように、杉谷 A 遺跡の周溝墓群は、杉谷古墳群に直接関係するものとして重要視されている。（坂本美宥）

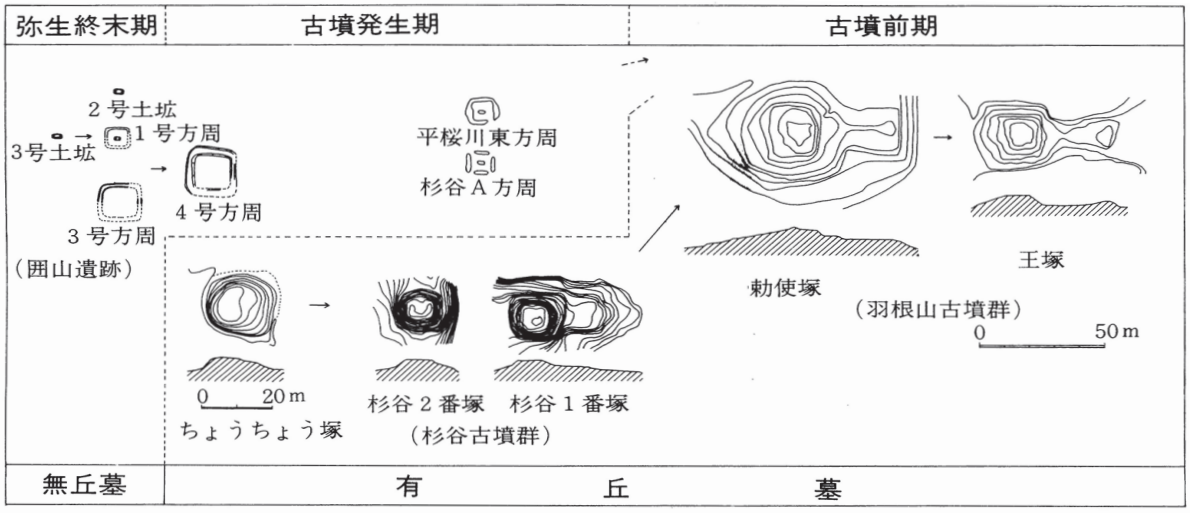
杉谷 A 遺跡のうち、第 1 号方形周溝墓出土の土器は、この当時、北陸土師器第Ⅰ様式[8]として認識された、石川県月影遺跡出土土器を標式とする月影式土器に対比できるものと考えられている。また、第 2 号方形周溝墓出土の土器は、複合口縁が弱化する傾向を示すことから、これよりは若干新しいが、やはり北陸土師器第Ⅰ様式の範疇で捉えられるものとされている。他の周溝墓からも土器が出土しており、整理途中だが古式土師器に限られると考えられている。

1981 年、藤田と駒見和夫は、富山市ちょうちょう塚の検討成果を述べる中で、杉谷 1 番塚古墳について、出土した甕の内面にハケ状工具による整形痕が見られることから、塚崎Ⅱ～Ⅲ式併行期のものに比定できるとし、その上で墳丘形態の様相と古式土師器を伴出することから、富山市勅使塚古墳に先行する前方後方墳的古墳とみなし、杉谷 1 番塚古墳→勅使塚古墳→富山市王塚古墳という変遷を考えた[9]。また、方墳系墓制の推移として、ちょうちょう塚から杉谷 2 番塚古墳や杉谷 5 号墳・6 号墳への変遷を考え、同論文掲載図の中で、杉谷 2 番塚古墳と杉谷 1 番塚とを古墳発生期のものとして位置付けた（第 4 図）。

藤田は 1983 年発行の著書でも、この図とほぼ同じものを掲載しており[10]、杉谷 1 番塚古墳に

第２表　北陸の編年（吉岡 1978）と諸氏による編年（藤田・駒見 1981）

弥生	後期		古墳	前期				吉岡　1978
I	II		I	II				
猫橋	塚崎 I		塚崎II-III（月影）	古府－高畠				
弥生後期	古墳発生期		古墳前期					
ちょうちょう塚	杉谷古墳群		勅使塚・王塚					藤田試案
唐古 V	○	庄内	布留					
弥生時代	プレ古墳時代－発生期古墳時代		古墳時代					石野・関川　1976
纒向 1	2	3	4					石野　1978
纒向石塚古墳	箸墓古墳		桜井茶臼山古墳					
	弥生終末期		古墳前期					
第 V 様式	第 VI 様式		布留式					都出　1979
古相	中相	新相	古相	新相（庄内式）	I 期	II・III	IV	
	纒向 I 式	II 式	III 式	IV式				



第 4 図　藤田・駒見による墳墓様式の変遷図（藤田・駒見 1981）

関して見解に違いはないものと考えられる。

その後、1990 年には富山大学考古学研究室が実施した勅使塚古墳と王塚古墳の測量調査報告書が刊行され、後者が箸墓古墳の 1/5 規模相似墳であるのに対し、前者がそれより後出の前期古墳である可能性が示された[11]。

これを受ける形で、1992 年、岸本雅敏は前方後円墳集成編年において、バチ形に開く前方部形態をもつ王塚古墳を 1 期に、それに後続するものとして勅使塚古墳を 2 期に位置づけた[12]。ただし、杉谷 1 番塚古墳については、前方後円墳集成に含まれることはなかった。

なお、勅使塚古墳の発掘調査を受けて[13]、1999 年、岸本は王塚古墳を勅使塚古墳に後続するものとして評価し直している[14]。また、西井龍儀は県内の前方後方墳を検討し、前方部長の全長に対する比率やくびれ部幅の後方部幅に対する比率を根拠に、高岡市石塚古墳→勅使塚古墳→氷見市柳田布尾山古墳という変遷を考え、王塚古墳は柳田布雄山古墳と類似した形態であるとした[15]。そして、これら諸氏の見解を受けて、富山県における出現期古墳の編年案が提示され、

勅使塚古墳は古墳時代前期前半（古府クルビ式段階）、王塚古墳はこれに後続する段階におかれた。また、弥生時代終末期（白江式段階）の杉谷４号墳に続いて、根拠は明示されていないが、勅使塚古墳と並行期に杉谷１番塚古墳が位置づけられた[16]。

2007 年、大野英子は、国史跡王塚・千坊山遺跡群を評価する中で、越中における主要墳墓編年試案を提示し、勅使塚古墳を古墳時代前期前半で古府クルビ式期に後続する時期に、王塚古墳を古墳時代前期後半の高畠式期に比定した[17]。また、杉谷 A 遺跡の方形周溝墓群を弥生時代終末期中葉の月影Ⅱ式期を中心とする時期に、杉谷４号墳を終末期後葉の白江式期に位置付けた。杉谷古墳群の他の墳墓については、終末期前葉の月影Ⅰ式期から古府クルビ式期までの幅の中で考えられているが、編年試案には古府クルビ式期に前方後方墳が図示されており、古墳群で唯一の前方後円（方）墳である杉谷１番塚古墳は、勅使塚古墳よりも１段階古い時期に想定されているものと考えられる。

2009 年、小黒智久は、富山市百塚住吉遺跡・百塚遺跡で確認された古墳出現期の前方後方墳及び前方後円墳を検討する中で、北陸における前方後方形墳丘墓と古墳時代前期前半の前方後方墳の一覧表を提示し、石川県漆町遺跡の編年で、不明確ながらも杉谷１番塚古墳を漆町６～７群期とした[18]。なお、勅使塚古墳を漆町７～８群期に、王塚古墳を漆町８～９群期に位置付けており、杉谷１番塚古墳の築造はこれらに先行するものと考えられている。

2012 年、鹿島昌也は、同じく百塚遺跡で確認された古墳群を検討する中で、弥生時代後期から古墳時代後期・終末期にかけての富山県内主要墳墓・古墳編年試案を提示した。このうち、弥生時代終末期前葉の月影Ⅰ式期に杉谷８号墳、杉谷 A 遺跡第６号方形周溝墓・第１号円形周溝墓を、終末期中葉の月影Ⅱ式期に杉谷 A 遺跡第２号・第３号方形周溝墓を、また終末期後葉の白江式期に杉谷４号墳を位置づけた。そして、大野 2007 と同じく、次の古府クルビ式期には杉谷古墳群として図示されるものの中に前方後方墳が見られることから、杉谷１番塚古墳を当該期にあてているものと考えられる[19]。なお､勅使塚古墳を同じ前期前半でも若干新しい段階に、王塚古墳を古墳時代前期後半の高畠式期に比定しており、大野 2007 や小黒 2009 とほぼ同様に、杉谷１番塚が先行するものとして図示されている。

このように、杉谷１番塚古墳は、隣接する杉谷 A 遺跡の周溝墓や杉谷４号墳よりは新しく、勅使塚古墳と王塚古墳よりは古い段階、あるいは勅使塚古墳と並行期のものとして考えられている。そして、これら評価の基礎となっているのは、富山市教育委員会 1974 や藤田らの見解と言える。ただし、富山市教育委員会 1974 や藤田らの見解の根拠となるものは、後方部と比べて低平で不定形な前方部形態やトレンチ出土のわずかな土器片のみと希薄である。墳丘形態の評価も、前方部の前端がどこまで伸びるのか、すなわち前方部の長さが後方部よりも短小なのか、あるいは凌駕するのかで変わってくる可能性も考えられる。

杉谷１番塚古墳は、古墳群で唯一の前方後方（円）墳であり、大型の四隅突出型墳丘墓である杉谷４号墳以降の墳墓の変遷や、杉谷古墳群における古墳の築造開始を考える上で、さらには勅使塚古墳や王塚古墳のような富山平野における 60m級の前方後円（方）墳の出現過程を検討する上でも重要な古墳である。杉谷１番塚古墳の築造時期を詳細に絞り込むことによって、これら課題解明への糸口になることが期待される。　　（髙橋浩二）

3. 富山大学人文学部考古学研究室による第１次調査の成果

第１次調査では、墳丘及び周辺地形の測量調査を実施した。期間は 2018 年７月 31 日～９月 20 日である。調査成果の概要は次の通りである。

杉谷１番塚古墳は、呉羽丘陵南西端に発達した杉谷丘陵内の三つの平坦面のうち、南東部平坦面端部の、北東から南西側へ伸びる小さな尾根筋に立地する前方後方墳である。比較的広い平坦面に、尾根筋の高所側に後方部を置き、側面を崖面側の富山平野へむけて築かれている。

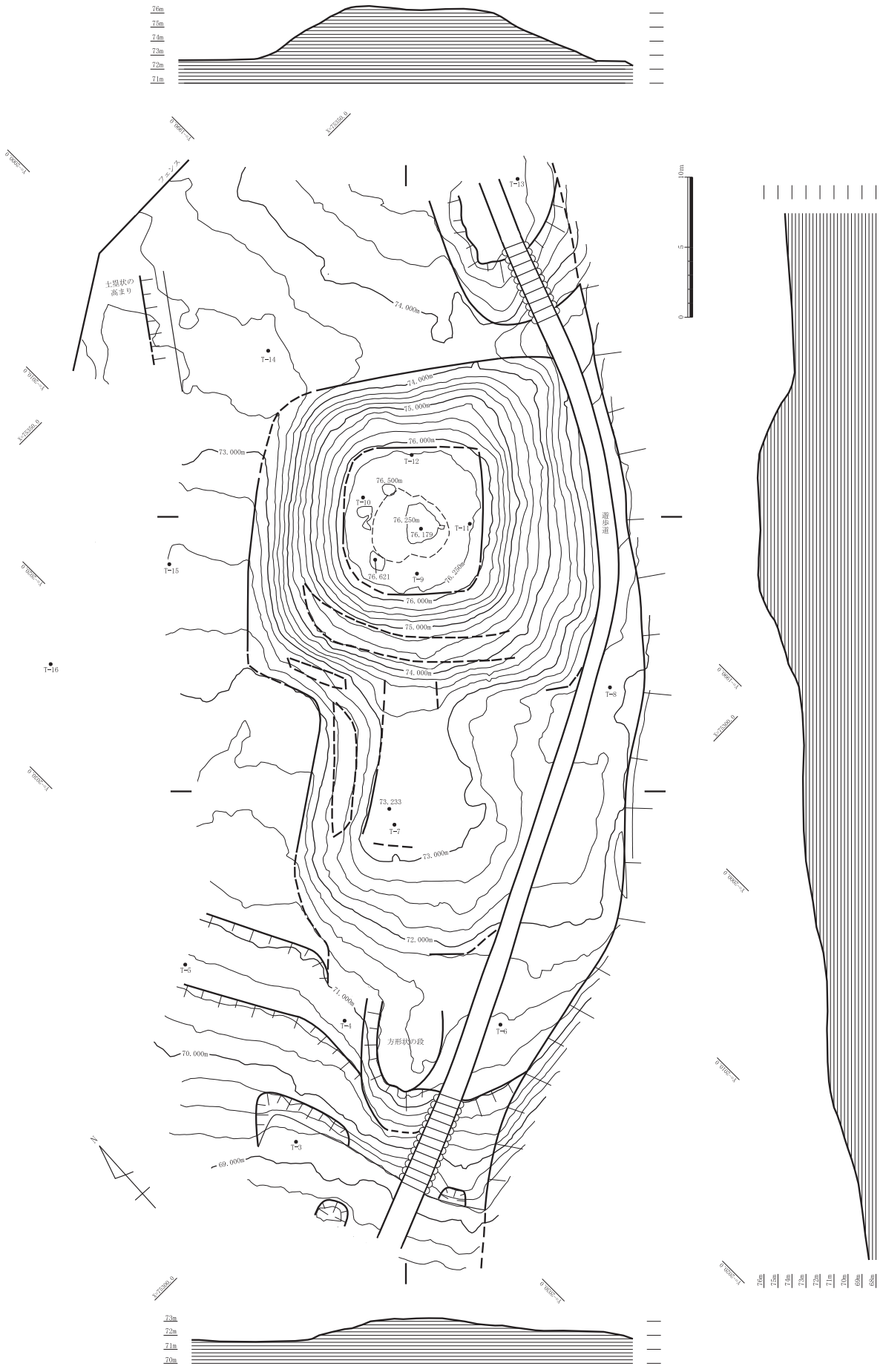
後方部の墳裾は、第５図に実線で示したように、西側隅部近くから北西面中央北側にかけてと北東面において比較的良好な遺存状況が確認できる。一方、西側隅部や北側隅部周辺、南側隅部ではやや不明瞭である。西側隅部の墳裾は標高 72.000ｍの等高線の箇所に位置するものと考えられ、ここから徐々に標高をあげて、北西側では 72.250 ～ 72.750ｍの等高線を巡っていく。北側隅部にかけては、点線で示したように墳裾線がやや内側へ入り込んでいく。北側隅部の墳裾はやや不明瞭だが、標高 73.250 ～ 73.500ｍの等高線の箇所へ丸みを帯びてつながる。北東面中央の墳裾は、北側隅部や東側隅部と比べて、約 0.5ｍ強高い位置を巡っている。ここから東側隅部にかけては、墳丘斜面の中程から墳裾部が外側へ張り出している。

東側隅部の墳裾は標高 73.250ｍの等高線の箇所までは確認できたが、すぐ東側には墳裾部に接して遊歩道が敷設されている。第２図において、東側隅部では標高 73.250ｍ、南東面中央から南側隅部にかけては標高 73.000ｍの等高線の箇所から墳丘斜面の傾斜がはじまり、この辺りに墳裾が想定されるものと考えたが、現状は緩やかなカーブを描いてつながる遊歩道まで墳丘斜面が伸びており、同じ標高の箇所に傾斜変換を見い出すことはできない。第５図と比較して南東面の墳裾部は全体的に膨らんでおり、富山市教育委員会による調査後にかなり改変がすすんだものと判断できる。遊歩道の東側は、崖面との間が約 1.2 ～ 2.8 ｍの平坦面となっており、この範囲までには墳丘はおさまるものと考えられる。南側隅部の箇所では、やや不明瞭だが、標高 72.250ｍと 72.500ｍの等高線の間に傾斜変換が認められたため、短い実線と点線で墳裾線を示した。前方部に面する南西面には、墳丘斜面の中程に幅 1.6 ～ 2.1ｍ程の帯状の平坦面が見られるが、他の箇所にはつながっておらず、段築とは認められない。

墳頂部には、主軸方向で約 10.5ｍ、その直交方向で約 9.9ｍの広い平坦面が認められる。この平坦面の中央には、5.3 × 5.5ｍ程の歪な楕円形で、深さ約 0.12ｍの浅い窪みが見られ（第５図の細点線部分）、土がかき出された跡と考えられる。そして、この窪みを取り囲むように、北東側から西側にかけて 0.2ｍ程の高まりが認められるが（第５図では標高 76.500ｍの等高線が３箇所に分かれて見られる範囲にあたる）、窪みを掘った際にかき出された土の堆積ではないかと思われる。墳頂部には石材などの散布は認められなかった。

くびれ部から前方部にかけての墳裾は、北西面の遺存状況が比較的よく、前方部先端へむけて外側へやや開いていく状況が認められた。一方、南東面は等高線が大きく乱れ、墳裾の位置が不明確なため、くびれ部及び前方部の幅は不明である。前方部北西斜面の中程にも幅 1.5ｍ程の帯状の平坦面が見られるが、同じく段築とは認められない。前方部の墳頂部にも広い平坦面が見られ、北西側の平坦面端部が墳裾と並行して外側へ開く状況が認められた。

前方部前面の位置について、富山市教育委員会の見解では、第２図のＣ及びＤトレンチで周溝が確認され、この辺りまで前方部が続く可能性が考えられている。第５図で言えば、この箇



第 5 図　杉谷 1 番塚古墳墳丘測量図（縮尺 1/400）

所は前方部南西側の方形状の段や、さらに南西の段差にあたり、ここまで墳丘が伸びるとすれば、前方部の長さは約 32m、またはその規模を越えると考えられる。この場合、古墳の全長は約 55.5m、またはこの値を越える規模となる。だが、第 1 次調査では、前方部の墳頂部平坦面から降る傾斜面が標高 71.750m の等高線で途切れ、方形状の段の所まで続くようには見えないことや、この等高線の位置には不明瞭ながら傾斜変換が認められ、それとともに平坦面を伴うことなどから、この箇所を前方部前面の候補と考えた。後方部との規模のバランスからみても、大きな違和感はない。この場合、方形状の段は別の墳丘、あるいは自然地形と考えられる。ただし、富山市調査後の改変の可能性も否めないため、さらなる調査が必要である。

なお、全体にわたって葺石や埴輪などの散布は認められなかった。以下に第 1 次調査で判明した墳丘の推定値を示す。

墳形：前方後方墳　　後方部高：約 2.4m（北東側）、約 3.5m（北西側）
全長：約 41.5m　　くびれ部高：約 1.1m（北西側）
後方部長：約 23.5m　　前方部長：約 18.0m
後方部幅：約 24.5m　　前方部高：約 1.2 ～ 1.6m（北西側）
後方部墳頂部平坦面：長さ約 10.5m、幅 9.9m
墳頂部平坦面最高所標高：76.621m（後方部）、73.233m（前方部）
後方部と前方部墳頂部平坦面最高所の比高差：3.388m　　（髙橋浩二）

注

⑴ 富山市教育委員会 1974。
⑵ 各トレンチの長さと幅は第 2 図、土層の厚さは第 3 図からそれぞれ筆者が計測した。
⑶ 第 6 図の細点線が富山市教育委員会によるボーリング調査に基づく推定周溝底部であり、各トレンチにおける周溝の深さはこれを基に筆者が計測した。
⑷ 報告書のまとめには、「方形墳に張り出し状部が付随し、前方後方墳的様相を呈する」と記されており（富山市教育委員会 1974：p.9）、はっきりと明言されているわけではないが、このような未発達な墳丘形態も古墳時代初期と推定させる一因と考えられる。
⑸ 注 ⑴ に同じ。
⑹ 藤田 1975：p.8。
⑺ 富山市教育委員会 1975：p.9。
⑻ 吉岡 1967 による。北陸土師器第Ⅰ様式は以降の調査研究で、石川県の北加賀における月影式と並行すること（橋本 1975）、月影式は月影Ⅰ式・Ⅱ式に区分できること（谷内尾 1983）、そして月影Ⅱ式の新段階には畿内系や東海系など外来系土器が流入し、月影式土器の変質・解体が土器組成に認められることから白江式（石川県漆町遺跡の編年で漆町 5 群・6 群に対応、後に漆町 4 群も加えられた）に分離する案が示されている（田嶋 1986）。畿内土器編年との関係について、谷内尾は月影Ⅰ式・Ⅱ式を第Ⅴ様式亜式あるいは庄内式併行期の段階（谷内尾 1983）とする。また、田嶋は白江式のうち漆町 4 群が庄内式古段階と併行すること、漆町 5 群が庄内式中段階前半と確実に併行し、庄内式古段階まで遡上する可能性をもつこと、漆町 6 群は多くを庄内式新段階と併行しつつ、布留式古段階前半と接触するとの見解を示している（田嶋 2008）。
⑼ 藤田・駒見 1981：pp.70–71。
⑽ 藤田 1983。
⑾ 小田木 1990：pp.18–22。

⑿ 岸本 1992。
⒀ 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1999・2003。
⒁ 岸本 1999。
⒂ 西井 1999。
⒃ 富山考古学会 1999。
⒄ 大野 2007。
⒅ 小黒 2009：p.281。
⒆ 鹿島 2012：p.274。

文献

大野英子 2007『王塚・千坊山遺跡群』日本の遺跡 18、同成社

小黒智久 2009「百塚住吉遺跡・百塚遺跡のいわゆる出現期古墳が提起する諸問題」『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉 B 遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書－主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－』富山市教育委員会

小田木治太郎 1990「王塚・勅使塚古墳と箸墓古墳」『越中王塚・勅使塚古墳測量調査報告－北陸の前方後円・後方墳の一考察－』富山大学人文学部考古学研究室

鹿島昌也 2012「総括」『富山市百塚遺跡発掘調査報告書－主要地方道富山八尾線道路改良事業に伴う発掘調査報告書（2）－』富山市教育委員会

岸本雅敏 1992「越中」『前方後円墳集成』中部編、山川出版社

岸本雅敏 1999「富山県の前方後円墳」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立 50 周年記念シンポジウム発表要旨・資料集、富山考古学会

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1999『富山県指定史跡勅使塚古墳発掘調査レポート－平成 10 年度富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座－』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003『平成 10 年度婦負郡婦中町勅使塚古墳　平成 11 年度中新川郡上市町永代遺跡　平成 12 年度東砺波郡福野町安居窯跡群　平成 13 年度射水郡小杉町中山中遺跡発掘調査報告』

田嶋明人 1986「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡』Ⅰ、石川県埋蔵文化財センター

田嶋明人 2008「古墳確立期土器の広域編年－東日本を対象とした検討（その 1）－」『石川県埋蔵文化財情報』第 20 号、石川県埋蔵文化財センター

富山考古学会 1999『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立 50 周年記念シンポジウム発表要旨・資料集

富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』

西井龍儀 1999「富山県の前方後方墳」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立 50 周年記念シンポジウム発表要旨・資料集、富山考古学会

橋本澄夫 1975「弥生土器－中部　北陸 4 －」『考古学ジャーナル』No.111 、ニュー・サイエンス社

藤田富士夫 1975「富山県における古墳発生期の調査とその成果－主に外地系要素の在り方をめぐって－」『古代学研究』第 76 号、古代学研究会

藤田富士夫 1983『日本の古代遺跡』13 富山、保育社

藤田富士夫・駒見和夫 1981「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』第 7 号、富山考古学会

谷内尾晋司 1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第 26 号、石川考古学研究会

吉岡康暢 1967「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』No.6、ニュー・サイエンス社

第 3 章　発掘調査の成果

1. 測量基準点

杉谷 1 番塚古墳については、平成 30（2018）年度に株式会社エイ・テックに委託して、平面直角座標系第Ⅶ系（世界測地系）による測量基準点の設置を行った。設置した測量基準点は、第 3 表及び第 6 図のとおりである。

G-1 ～ 3 は富山大学杉谷キャンパス内において、いずれも道路脇の側溝やガードレール基礎などのコンクリート上に設定した。また、G-4 は道路脇の丘陵掘削面にプラスチック杭を埋設して設定した。そして、これらの基準点を用いて、道路に隣接する駐車場から杉谷 1 番塚古墳へと通じる遊歩道沿いに、T-1・2・6・8・13 を、また古墳上とその周辺に T-3 ～ 5・7・9 ～ 12・14・15 を同じくプラスチック杭を埋設して設定した。T-3・4 は前方部の南西側、T-5 は前方部の西側、T-7 は前方部墳頂平坦面、そして T-9 ～ 12 は後方部墳頂平坦面、T-14 は後方部の北側、T-15 は後方部の北西側に位置する。

第 2 次調査は、後方部の北東側及び北西側墳裾部周辺を対象とするものであり、第 1・第 2 調査区の設定にあたっては、主に墳頂部平坦面の T-9 ～ 12 を用いた。

（高橋浩二）

2. 調査成果

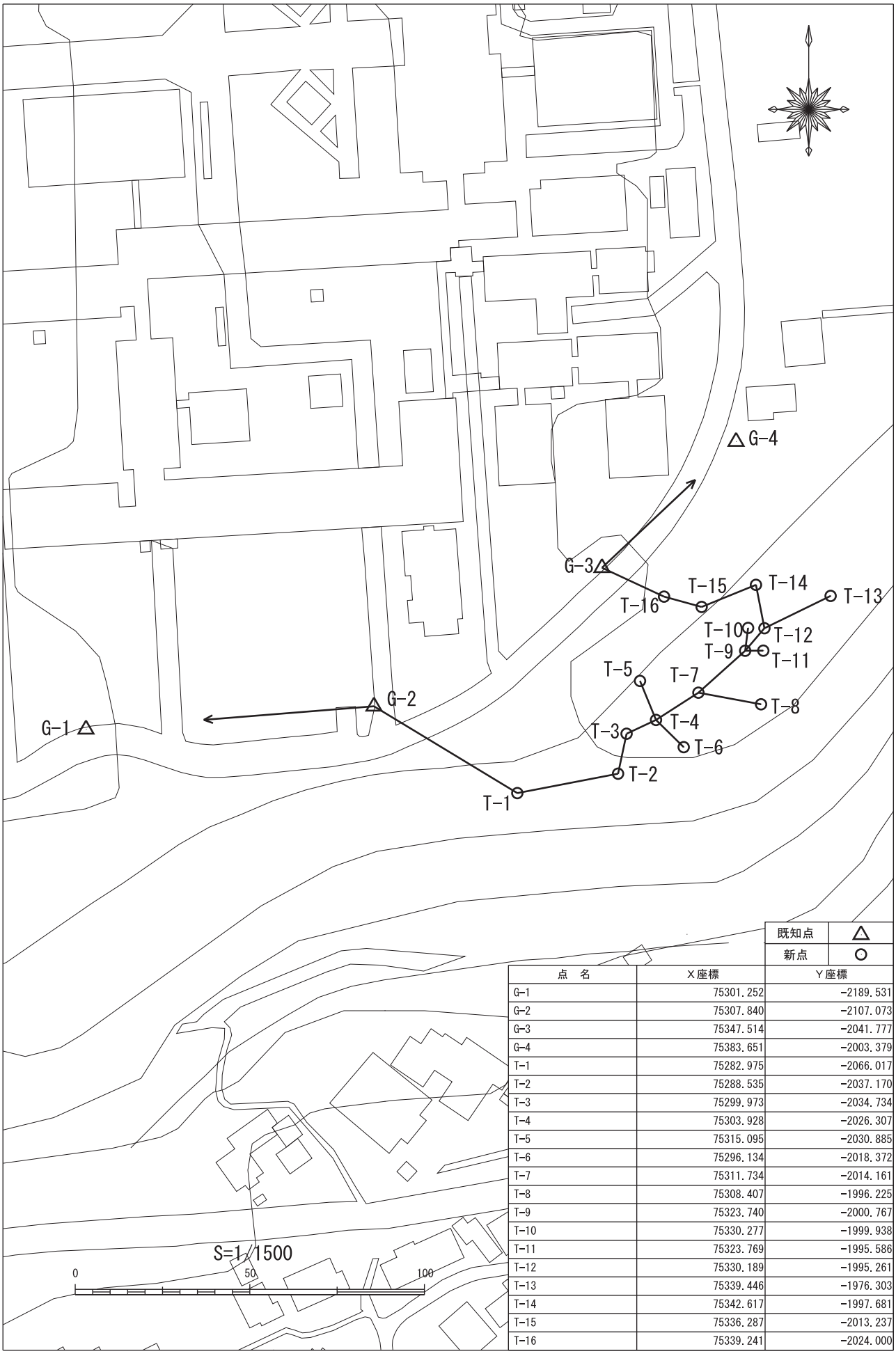
(1) 調査の目的と調査区の設定

今回の調査では、杉谷 1 番塚古墳の後方部を初めて発掘して、周溝の存在や規模などを確認すること、また墳裾部を確認することで、古墳の正確な規模を明らかにするための手がかりを得ること、そして築造時期解明の判断材料となる土器資料を得ることなどを主な目的とした。

調査は、後方部北東側中央の墳裾部において墳丘主軸上にあたる位置に第 1 調査区を、また後方部北西側中央の墳裾部において墳丘主軸に直交する位置に第 2 調査区を設定して実施した。第 2 調査区においては墳丘盛土と旧表土、地山との関係を明らかにするために、一部墳丘側（東側）へ拡張した。

第 3 表　測量基準点一覧

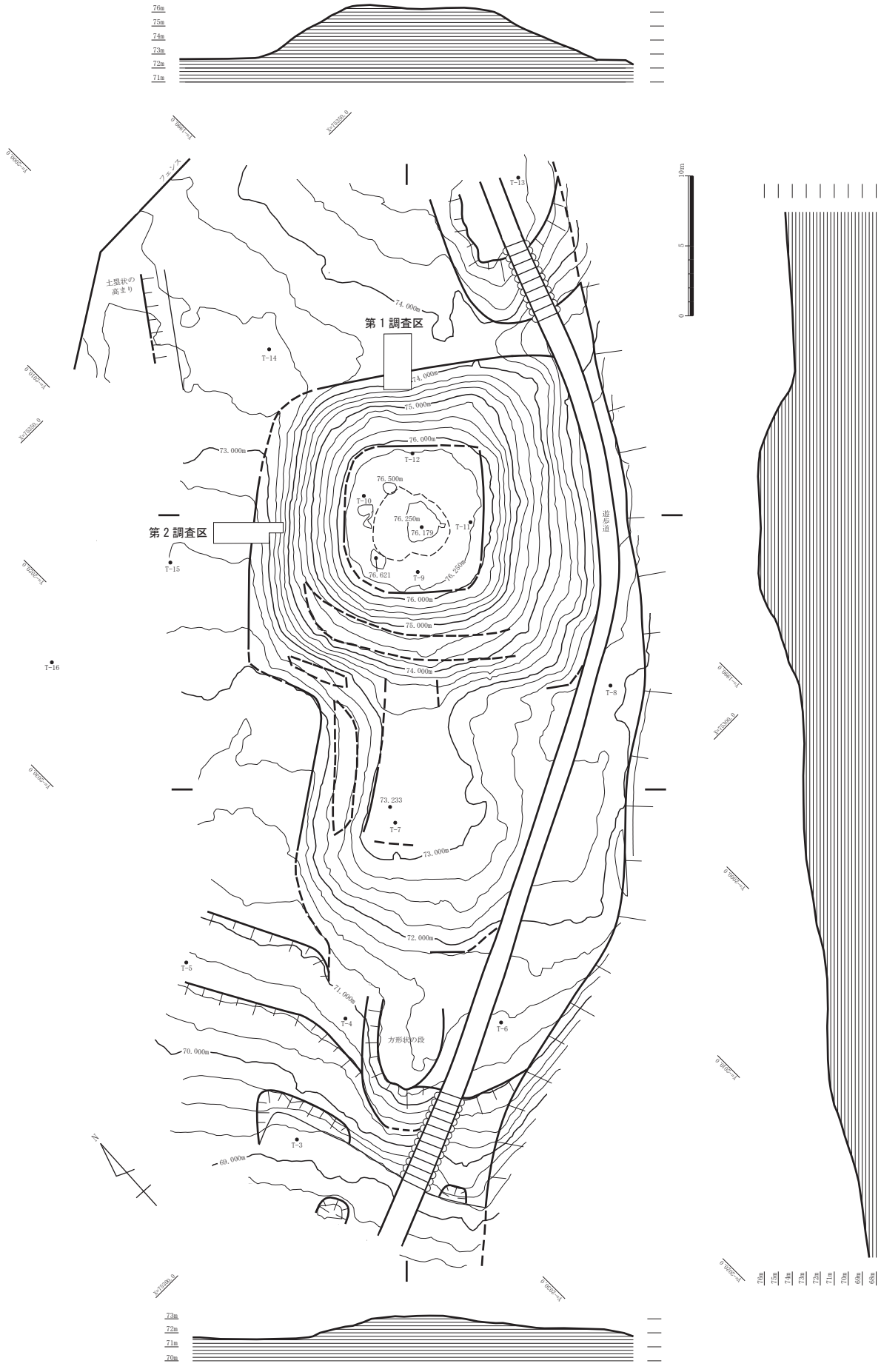
点名	X 座標	Y 座標	標高（m）	点名	X 座標	Y 座標	標高（m）
G-1	75301.252	-2189.531	58.742	T-7	75311.734	-2014.161	73.230
G-2	75307.840	-2107.073	63.099	T-8	75308.407	-1996.225	72.123
G-3	75347.514	-2041.777	68.537	T-9	75323.740	-2000.767	76.414
G-4	75383.651	-2003.379	73.842	T-10	75330.277	-1999.938	76.492
T-1	75282.975	-2066.017	66.129	T-11	75323.769	-1995.586	76.284
T-2	75288.535	-2037.170	68.308	T-12	75330.189	-1995.261	76.321
T-3	75299.973	-2034.734	69.200	T-13	75339.446	-1976.303	74.820
T-4	75303.928	-2026.307	70.916	T-14	75342.617	-1997.681	73.423
T-5	75315.095	-2030.885	70.778	T-15	75336.287	-2013.237	72.460
T-6	75296.134	-2018.372	71.468	T-16	75339.241	-2024.000	73.135



既知点	△
新点	○

点　名	X座標	Y座標
G-1	75301.252	-2189.531
G-2	75307.840	-2107.073
G-3	75347.514	-2041.777
G-4	75383.651	-2003.379
T-1	75282.975	-2066.017
T-2	75288.535	-2037.170
T-3	75299.973	-2034.734
T-4	75303.928	-2026.307
T-5	75315.095	-2030.885
T-6	75296.134	-2018.372
T-7	75311.734	-2014.161
T-8	75308.407	-1996.225
T-9	75323.740	-2000.767
T-10	75330.277	-1999.938
T-11	75323.769	-1995.586
T-12	75330.189	-1995.261
T-13	75339.446	-1976.303
T-14	75342.617	-1997.681
T-15	75336.287	-2013.237
T-16	75339.241	-2024.000

第６図　測量基準点配置図（縮尺 1/1500）



第 7 図　調査区配置図（縮尺 1/400）

第1調査区は、長辺4.0m、短辺2.0mの長方形とした。第2調査区は、長辺4.0m、短辺1.5mの長方形とし、拡張区を長辺1.0m、短辺0.75mとした。調査面積は、全体で14.75㎡である。

（永田峻一郎・髙橋浩二）

(2) 第1調査区（第8図）

調査区の設定　まず測量基準点T-12にトータルステーションを立て、T-10及びT-9を後視点として、T-12から4.5m離れた墳丘斜面において墳丘主軸上に調査区の南隅を、次に南隅から4.0m離れた墳丘主軸上の位置に東隅を、そして南隅及び東隅からそれぞれ2.0m離れた墳丘主軸と直交する位置に西隅と北隅を設定した。

四隅の座標は南隅がX=75333.560、Y=-1992.227、標高は74.337m、東隅がX=75336.354、Y=-1989.629、標高は73.906m、西隅がX=75334.862、Y=-1993.587、標高が74.174m、北隅がX=75337.667、Y=-1991.008、標高が73.829mである。

なお、以下では、第1調査区の南西側の壁を南壁、南東側の壁を東壁、北東側の壁を北壁、北西側の壁を西壁とし、また南壁側を南、東壁側を東、北壁側を北、西壁側を西と呼称する。

基本層序　第1調査区の基本層序は、表土（第1層）、堆積土（第2～6層）、周溝埋土（第7～18層）、墳丘盛土（第19層）、旧表土（第20層）、漸移層（第21層）、地山（第Ⅰ層・第Ⅱ層）となっている。表土は灰黄褐色砂質土、旧表土は黒褐色粘質土であった。地山は周溝底面の高さを境に二層に分かれ、第Ⅰ層は褐色粘質土、第Ⅱ層はにぶい黄褐色の粘質土であった。

発掘経過　厚さ0.1～0.3mの灰黄褐色砂質土の表土を取り除いたところ、調査区全体で黒色砂質土（第2層）を検出した。その後、周溝の確認を目的に、調査区中央より東半部を幅1.0mのサブトレンチとして設定し、掘り下げた。その結果、1㎜以下の橙色土粒を1%程度含む黒色砂質土（第3層）を検出した。また、その下層において、黒褐色砂質土（第4層・第6層）と黒色砂質土（第5層）を検出した。

そして、これらの堆積土を取り除くと、現地表面から約0.5m下のところで、周溝埋土と考えられる黒褐色粘質土（第7層・第9層）と黒色粘質土（第8層）を確認した。次に、第7層を掘り下げたところ、1㎜以下の明黄褐色土粒を1%含む黒色粘質土（第10層）に続いて、1㎜程度の橙色土粒を2%含む黒色粘質土（第11層）や3㎜程度の橙色土粒を3%含む黒褐色粘質土（第12層）を、さらにその下層から1～2㎜の黄橙色土粒を3%含む黒色粘質土（第13層）に続いて1㎜以下の明黄褐色土粒を1%含む黒色粘質土（第14層）や橙色土粒を30%含む黒色粘質土（第16層）を検出した。

また、調査区南端から北へ0.32mまでの範囲では、2㎜のにぶい赤褐色土粒を2%含む黒色粘質土の墳丘盛土（第19層）を検出した。そして、この層を掘り下げると、黒褐色粘質土の旧表土（第20層）と、その下層から3㎜の褐色土粒を3%含む黒色粘質土（第21層）を確認した。第21層は漸移層と判断した土層である。第21層の下では、調査区の北側へ向かって落ち込んでいく褐色粘質土の地山（第Ⅰ層）を検出した。そして、この地山第Ⅰ層のつながりを確認するために、調査区中央の一部を深掘りしたところ、現地表面から約1.5m下の地点において、にぶい黄褐色粘質土の地山第Ⅱ層を確認した。

その後、地山第Ⅱ層が確認された地点から周辺へ向かって周溝埋土（第16～18層）を順に

取り除いたところ、周溝底面を検出することができた。また、調査区北端から南へ約 2.2mの位置において、地山が墳丘側へ向かって急激に立ち上がる状況を確認し、この傾斜変換点を墳裾部と判断した。周溝底面ではピット状遺構 1 基を検出した。

なお、調査区西半部については、南側において墳丘盛土（第 19 層）と、その下層から旧表土（第 20 層）及び黒色粘質土（第 21 層）を確認した。これより北側の範囲では、周溝埋土上層の堆積土である第 4 層の掘り下げ途中で調査を止めている。

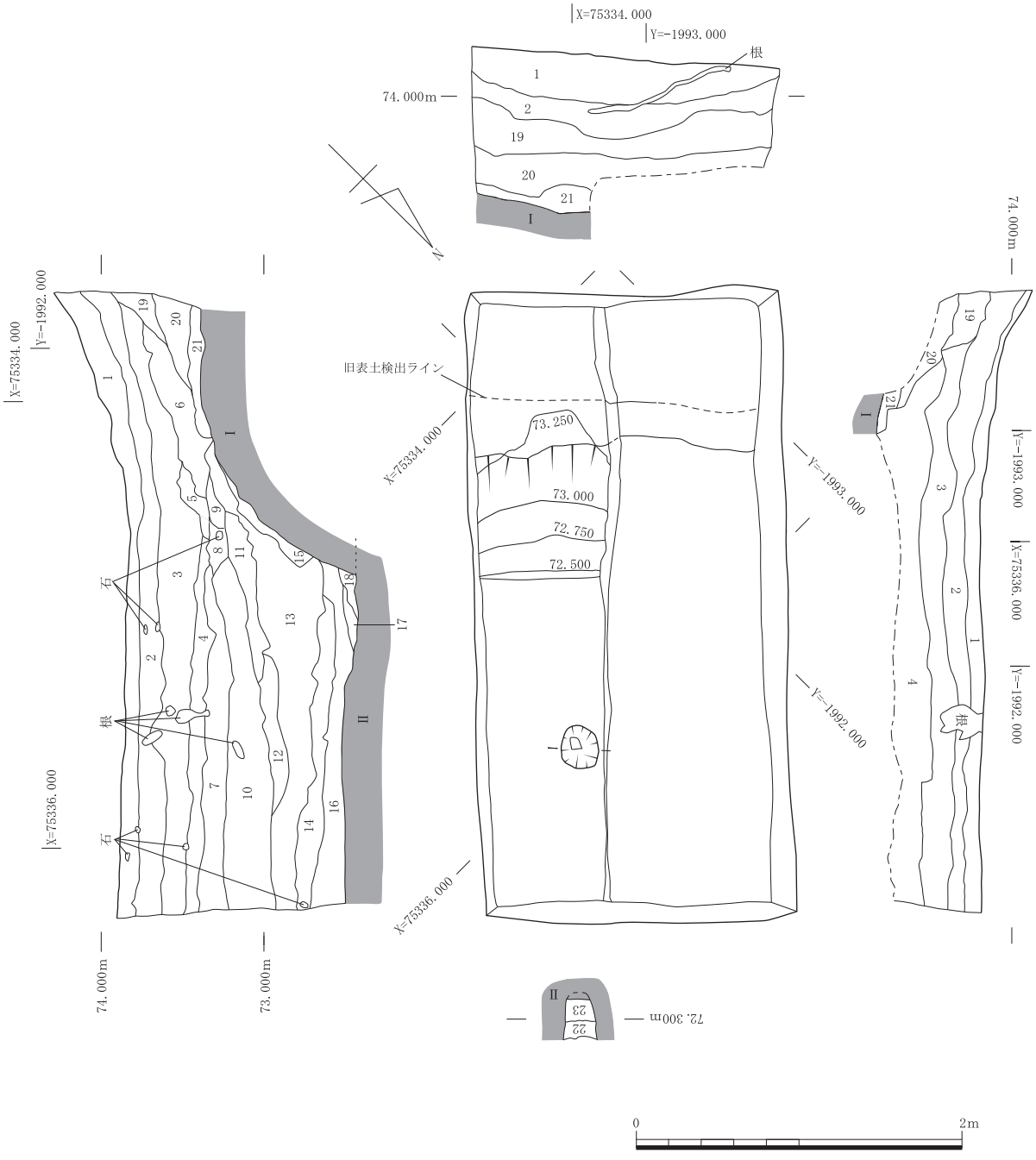
周溝埋土　墳丘盛土の第 19 層の直上に堆積していることから、第 6 層は墳丘築造以降の堆積土で、その最下層にあたるものと判断した。第 6 層の上に堆積している第 5 層や第 3 層、さらに第 4 層も堆積土と判断できる。第 9 層は、この第 6 層の下に堆積している。両層はともに黒褐色粘質土の土層だが、第 6 層が墳丘盛土の上まで堆積しているのに対し、第 9 層は周溝の範囲内に収まっており、このことから今回の調査では第 9 層を周溝埋土と判断した。また、第 9 層より上層で、かつ第 4 層の下にある第 7 層や第 8 層も周溝埋土と判断した。第 7 層は周溝埋土の最上層にあたる層である。この層は、1㎜の明赤褐土色粒を 1%含む黒褐色粘質土で、調査区南端から北へ 1.78mの地点からはじまり、北端にかけて徐々に厚くなるように堆積している。第 8 層と第 9 層は墳丘側にしか認められない。第 8 層は黒色粘質土で、調査区南端から北へ約 1.5 ～ 1.8mまでの範囲に堆積している。第 9 層は黒褐色粘質土で、調査区南端から北へ約 1.2 ～ 1.5 mまでの範囲に堆積している。第 10 層は、調査区南端から北へ 1.7mの地点からはじまり、厚さ最大約 0.28mで、北端にかけて徐々に厚くなるように堆積している。

第 11 層は、調査区南端から北へ 1.44 ～ 2.5mまでの範囲に堆積している。この層は周溝内の墳丘側にしか認められない。第 12 層は、調査区南端から北へ約 2.3 ～ 3.3mまでの範囲で、次の第 13 層が浅くくぼんだ箇所に堆積している。第 13 層は、調査区南端から北へ 0.98mの地点からはじまり、厚さ最大約 0.42mで、北端にかけて徐々に薄くなるように堆積している。第 14 層は、調査区南端から北へ 1.94mの地点からはじまり、北端までの範囲に堆積している。周溝内側斜面に接する箇所には認められない。第 15 層は黒褐色土粒を 30%含む明黄褐色粘質土である。調査区南端から北へ約 0.98 ～ 1.66mまでの範囲に、墳丘側から周溝内側斜面を覆うように堆積している。第 16 層は、調査区南端から北へ 1.6mの地点からはじまり、北端までの範囲において、周溝底面に広く堆積している。

第 17 層と第 18 層は周溝内側斜面の下端付近にしか認められない。第 17 層は黒色土粒を 15%含む明黄褐色粘質土で、調査区南端から約 1.86 ～ 2.28mまでの範囲に堆積している。第 18 層は明黄褐色土粒を 10%含む黒色粘質土で、調査区南端から約 1.66 ～ 2.06mまでの範囲に堆積している。周溝埋土の最下層にあたる層である。

これら周溝埋土の第 7 ～ 18 層の堆積過程について主なものを示すならば、第 8 図の東壁断面図のように、まず周溝内側斜面の箇所に、第 17 層や第 18 層が墳丘側から流れ込んだ後、第 16 層や第 14 層が水平堆積したと考えられる。そしてその後、第 15 層や第 13 層などが再び墳丘側から流れ込んだ後、第 10 層や第 7 層が水平堆積したものと考えられる。

周溝　周溝内側斜面の上端は、サブトレンチ内において、調査区南端から北へ約 1.0mの箇所に位置する。この地点の標高は約 73.200mである。第 8 図の平面図では標高 73.000mの等高線と旧表土検出ラインを示す点線の間に位置する。周溝内側斜面の下端は、調査区南端から北へ



第 8 図　第 1 調査区平面図・断面図（縮尺 1/40）

約 1.7ｍの箇所に位置する。この地点の標高は約 72.440ｍである。平面図では、標高 72.500ｍの等高線のわずかに北側に位置する。周溝内側斜面の傾斜角度は、周溝上端から約 0.24 ｍの範囲では約 30 度と緩やかだが、ここから下端までの範囲では約 65 度と急傾斜になっている。

調査区の中央から西半部においては、地山第Ⅰ層が調査区の北側へ向かって落ち込みはじめる箇所を平面的に確認し、これを周溝内側斜面の上端と判断して平面図にそのラインを描いた。しかし、周溝埋土の掘り下げは行っていないため、周溝内側斜面の状況は不明である。

第 1 調査区断面図層名

東壁断面

［表土］	1	Hue10YR4/2 灰黄褐色砂質土
［堆積土］	2	Hue7.5YR2/1 黒色砂質土
	3	Hue7.5YR2/1 黒色砂質土（1㎜以下の Hue7.5YR6/6 橙色土粒を 1%含む）
	4	Hue10YR2/2 黒褐色砂質土（1㎜以下の Hue7.5YR6/6 橙色土粒を 1%未満含む）
	5	Hue10YR1.7/1 黒色砂質土
	6	Hue7.5YR2/2 黒褐色砂質土（1㎜、稀に 3㎜程度の Hue7.5YR6/6 橙色土粒を 1%含む）
［周溝埋土］	7	Hue10YR3/2 黒褐色粘質土（1㎜の Hue2.5YR5/6 明赤褐色土粒を 1%含む）
	8	Hue10YR1.7/1 黒色粘質土
	9	Hue7.5YR2/2 黒褐色粘質土
	10	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（1㎜以下の Hue7.5YR5/6 明黄褐色土粒を 1%含む）
	11	Hue2.5Y2/1 黒色粘質土（1㎜の Hue7.5YR6/6 橙色土粒を 2%含む）
	12	Hue10YR2/2 黒褐色粘質土（3㎜の Hue2.5YR6/6 橙色土粒を 3%含む）
	13	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（1 ～ 2㎜の Hue10R6/3 黄橙色土粒を 3%含む）
	14	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（1㎜以下の Hue7.5YR5/6 明黄褐色土粒を 1%含む）
	15	Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（Hue10YR2/2 黒褐色土粒を 30%含む）
	16	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（Hue7.5YR7/6 橙色土粒を 30%含む）
	17	Hue10YR6/8 明黄褐色粘質土（Hue7.5YR2/1 黒色土粒を 15%含む）
	18	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（Hue10YR6/8 明黄褐色土粒を 10%含む）
［盛土］	19	Hue10YR2/1 黒色粘質土（2㎜の Hue5YR5/4 にぶい赤褐色土粒を 2%含む）
［旧表土］	20	Hue5YR2/1 黒褐色粘質土
［漸移層］	21	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（3㎜の Hue10YR4/4 褐色土粒を 3%含む）
［地山］	Ⅰ	Hue10YR4/4 褐色粘質土
	Ⅱ	Hue10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土

南壁断面

［表土］	1	Hue10YR4/2 灰黄褐色砂質土
［堆積土］	2	Hue7.5YR2/1 黒色砂質土
［盛土］	19	Hue10YR2/1 黒色粘質土（2㎜の Hue5YR5/4 にぶい赤褐色土粒を 2%含む）
［旧表土］	20	Hue5YR2/1 黒褐色粘質土
［漸移層］	21	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（3㎜の Hue10YR4/4 褐色土粒を 3%含む）
［地山］	Ⅰ	Hue10YR4/4 褐色粘質土

西壁断面

［表土］	1	Hue10YR4/2 灰黄褐色砂質土
［堆積土］	2	Hue7.5YR2/1 黒色砂質土
	3	Hue7.5YR2/1 黒色砂質土（1㎜以下の Hue7.5YR6/6 橙色土粒を 1%含む）
	4	Hue10YR2/2 黒褐色砂質土（1㎜以下の Hue7.5YR6/6 橙色土粒を 1%未満含む）
［盛土］	19	Hue10YR2/1 黒色粘質土（2㎜の Hue5YR5/4 にぶい赤褐色土粒を 2%含む）
［旧表土］	20	Hue5YR2/1 黒褐色粘質土
［漸移層］	21	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（3㎜の Hue10YR4/4 褐色土粒を 3%含む）

ピット状遺構

［埋土］	22	Hue7.5YR2/1 黒色粘質土（1㎜以下の Hue7.5YR1.7/1 黒色土粒を含む）
	23	Hue7.5YR2/2 黒褐色粘質土（Hue7.5YR6/8 橙色土粒を 7%含む）
［地山］	Ⅱ	Hue10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土

調査区内においては周溝の外側斜面が検出されていないため、その正確な規模等は不明である。確認した範囲内では、周溝の幅は約 3.0m、また最深部は調査区南端から北へ 1.96mの地点で、現地表面からの深さ約 1.5m、標高約 72.400mを測る。周溝の断面形は底部の平らな逆台形を呈している。

墳丘盛土　調査区南端から北へ 0.32mまでの範囲で第 19 層を確認した。黒色系の土色ではあるが、地山第Ⅰ層由来と考えられるにぶい赤褐色土粒を多少なりとも含んでおり、第 20 層とは区別できる。第 19 層は、旧表土と判断できる第 20 層の直上にあること、また第 20 層よりも墳丘側に位置し、かつ第 20 層北側端部に見られる傾斜に沿って積まれているような様相が認められることなどから、墳丘盛土と判断した。第 19 層は、東壁断面図で標高 73.600mの地点からはじまり、約 30 度の傾斜で、墳頂部側へ向かって徐々に厚くなるように積まれている。

旧表土・漸移層　調査区南端から北へ 0.9mまでの範囲で第 20 層と第 21 層を確認した。第

21層は地山第Ⅰ層の直上に堆積しており、周溝内側斜面上端の0.1m手前の地点で途切れている。また、第21層の黒色粘質土の中には地山第Ⅰ層由来と考えられる褐色粘質土が混じり、第20層に近づくにしたがって、この層と同じ黒褐色粘質土の割合が増すことから、第21層を漸移層と判断した。第21層は約0.08mの厚さで、地山第Ⅰ層に対しほぼ水平に堆積している。

第20層はこの漸移層の直上にあり、旧表土と判断した。調査区南端から北へ0.6mの位置で途切れて、周溝埋土にはかからない。第20層が墳丘側の調査区南端の位置で厚く、北側へいくほど徐々に薄くなるのは、墳丘築造時にこの部分が削り出されて成形されたものと判断できる。第8図東壁断面図のように、周溝内側斜面の上半部から第20層上面にかけての傾斜がほぼ揃っていることなどから、第21層北側端部や周溝内側斜面も、この一連の削り出しにより成形されたものと考えられる。旧表土・漸移層と地山第Ⅰ層との境の標高は73.310～73.400mである。

調査区の西半部においても、同じような位置で第20層と第21層を検出することができた。第8図の平面図において旧表土検出ラインとして示している。当初、旧表土と気付かずに、若干掘りすぎた部分は点線で示しているが、西壁断面においても両層を確認している。

ピット状遺構　調査区北端から南へ0.88～1.16m、同じく東端から西へ0.52～0.72mの位置において、周溝埋土の第16層を取り除いたところ、周溝底面から円形のピット状遺構を1基検出した。最大径約0.2m、深さ約0.24mで、底面の標高は72.160mである。

遺構内には、第22層と第23層がほぼ水平に堆積していた。第22層は1㎜以下の黒色土粒を含む黒色粘質土である。第23層は橙色土粒を7%含む黒褐色粘質土である。

遺物の出土状況　第1調査区からは土器片23点、須恵器片3点、磁器片13点の合計39点が出土した。層位との関係は次のとおりである。

表土の第1層と堆積土の第2層から、接合可能な磁器片12点が出土した。また、第2層からそれとは別個体の磁器片1点が出土した。

第10層からは接合可能な須恵器片が3点出土した。また、同層からは高杯脚裾部にあたる接合可能な土器片3点と、これと同一個体と考えられる土器片1点が出土した。第13層からは高杯脚柱部の土器片1点と、第14層との境目から蓋にあたる土器片1点が出土した。第14層からは壺の有段口縁部と、壺もしくは甕の有段口縁部にあたる土器片が1点ずつ出土した。第16層からは蓋が2点出土した。うち1点は墳裾部の近く、周溝内側斜面の下端から北へ約0.6mの位置において、ほぼ完形のものが内面を上にし、斜めに傾いた状態で出土した。

（尾関さゆり・関杏介・小山翔大・髙橋浩二）

(3) 第2調査区（第9図）

調査区の設定　まず測量基準点T-11にトータルステーションを立て、T-10を後視点として、T-11から18.5m離れた墳丘主軸と直交する位置に調査区の北隅を、また4m墳丘側へ戻った位置に北東隅を設定した。次に、北隅と北東隅を結んだラインと直交する方向へ1.5m離れた位置に、それぞれ西隅と南隅を設定した。その後、調査区北東側に拡張区を設けることとなり、北東隅から1.0mの位置に東隅を、またここから0.75m離れた直交する位置に南東隅を設定した。

各隅の座標は、北隅がX=75336.297、Y=-2009.177、標高は72.749m、北東隅がX=75333.669、Y=-2006.162、標高は73.104m、西隅がX=75335.165、Y=-2007.149、標高は72.647m、南隅がX=75332.537、Y=-2010.164、標高は73.078mである。また、拡張区の東隅がX=75333.031、

Y=−2005.983、標高は 73.513m、南東隅が X=75332.552、Y=−2005.983、標高は 73.501mである。

なお、以下では、第 2 調査区の北東側の壁を北壁、北西側の壁を西壁、南西側の壁を南壁、拡張区である南東側の壁を東壁とし、北壁側を北、西壁側を西、南壁側を南、東壁側を東と呼称する。

基本層序　第 2 調査区の基本層序は、表土（第 1 層）、堆積土（第 2 ～ 4 層）、周溝埋土（第 5 ～ 12 層）、墳丘盛土（第 13 層）、旧表土（第 14 層）、地山（第Ⅰ層）となっている。表土は黒褐色砂質土、旧表土は極暗褐色粘質土で、地山は第 1 調査区と同じ褐色粘質土であった。

発掘経過　厚さ 0.04mの表土を取り除いたところ、調査区東端から西へ 1.32mまでの範囲で黒褐色砂質土（第 2 層）を、また調査区西端までの範囲で黒褐色砂質土（第 3 層）を検出した。またその後、黒色砂質土（第 4 層）を検出した。

そして、これらの堆積土を取り除いたところで、1㎜以下の明褐色土粒を 1%含む黒褐色粘質土（第 5 層）及び 1㎜の明褐色土粒を 2%含む黒褐色粘質土（第 8 層）、1㎜の明褐色土粒を 1%含む黒褐色粘質土（第 9 層）を検出した。これらは周溝埋土と考えられる土層である。

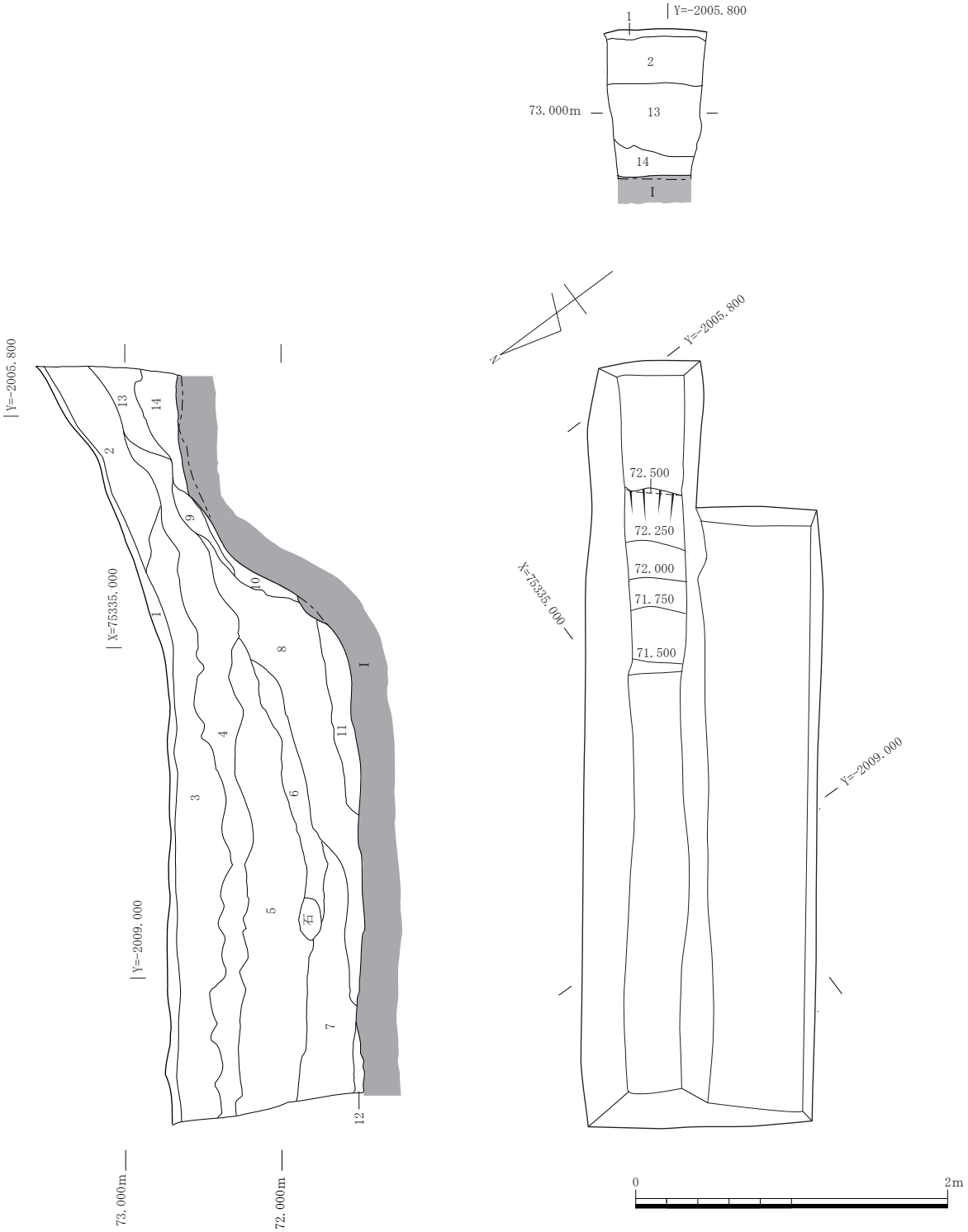
その後は、周溝の確認を目的に、調査区中央より北半部を幅 0.75mのサブトレンチとして設定し掘り下げた。そして、第 5 層を掘り下げたところ、1㎜以下の明褐色土粒を 1%含む黒褐色粘質土（第 6 層）に続いて、1㎜以下の明褐色土粒を 1%含む黒色粘質土（第 7 層）や 1㎜の明褐色土粒を 10%含む黒色粘質土（第 12 層）を確認した。また、第 8 層の下では、1 ～ 2㎜の明褐色土粒を 3%含む暗褐色粘質土（第 10 層）や 1㎜の明褐色土粒を 1%含む黒褐色粘質土（第 11 層）を検出した。

続いて、第 8･12 層を掘り下げたところで、褐色粘質土の地山（第Ⅰ層）を検出するに至った。この地山第Ⅰ層を東側へおいかけて第 11 層を取り除いたところ、調査区東端から約 1.04mの位置において、地山が墳丘側へ向かって急激に立ち上がる状況を確認し、この傾斜変換点を墳裾部と判断した。

しかし、この時点では未だ墳丘盛土や旧表土が検出されておらず、また周溝内側斜面の端部も不明であったため、調査区を北壁に沿って墳丘側へ長さ 1.0m、幅 0.75m拡張することとした。その結果、第 4 層を取り除いたところで、黒色粘質土の墳丘盛土（第 13 層）を検出した。そして、この層を掘り下げると、極暗褐色粘質土の旧表土（第 14 層）と、その下層から褐色粘質土の地山第Ⅰ層を確認した。

なお、調査区の南半部については、第 1 層の表土を除去し、第 2 層及び第 3 層を掘り下げたところ、または第 4 層途中の、現地表面から深さ約 0.4mの位置で調査を止めている。

周溝埋土　墳丘盛土の第 13 層の直上に堆積していることから、第 4 層は墳丘築造以降の堆積土で、その最下層にあたるものと判断した。一方、この層の下に見られる第 8 層と第 9 層は、第 13 層にはかからず、堆積の範囲が周溝内に収まっている。このことから、今回の調査では第 8 層と第 9 層を周溝埋土と判断した。第 8 層と第 4 層の間に見られる第 5 ～ 7 層とも周溝埋土と判断した。第 5 層は、周溝埋土の最上層にあたる層である。この層は、調査区東端から西へ 1.74mの地点からはじまり、調査区西端にかけて徐々に厚くなるように、最大 0.4mの厚さで堆積している。第 6 層は、調査区東端から西へ 1.86m～ 3.52mの範囲に、約 0.12mの厚さで堆積している。第 7 層は、調査区東端から西へ 3.04mの地点からはじまり、調査区西端にかけて徐々に厚くな



第 9 図　第 2 調査区平面図・断面図（縮尺 1/40）

第 2 調査区平面図・断面図層名

北壁断面

［表土］	1	Hue10YR2/2 黒褐色砂質土
［堆積土］	2	Hue7.5YR3/2 黒褐色砂質土
	3	Hue7.5YR2/2 黒褐色砂質土
	4	Hue10YR2/1 黒色砂質土
［周溝埋土］	5	Hue7.5YR2/1 黒褐色粘質土（1㎜以下の明褐色土粒を 1% 含む）
	6	Hue10YR2/2 黒褐色粘質土（1mm 以下の明褐色土粒を 1% 含む）
	7	Hue5YR1.7/1 黒色粘質土（1㎜以下の明褐色土粒を 1% 含む）
	8	Hue10YR3/1 黒褐色粘質土（1㎜の明褐色土粒を 2% 含む）
	9	Hue10YR3/2 黒褐色粘質土（1㎜の明褐色土粒を 1% 含む）
	10	Hue10YR3/4 暗褐色粘質土（1 ～ 2㎜の明褐色土粒を 3% 含む）
	11	Hue5YR2/1 黒褐色粘質土（1㎜の明褐色土粒を 1% 含む）
	12	Hue7.5YR1.7/1 黒色粘質土（1㎜の明褐色土粒を 10% 含む）
［盛土］	13	Hue10YR1.7/1 黒色粘質土
［旧表土］	14	Hue7.5YR2/3 極暗褐色粘質土
［地山］	Ⅰ	Hue10YR4/4 褐色粘質土

東壁断面

［表土］	1	Hue10YR2/2 黒褐色砂質土
［堆積土］	2	Hue7.5YR3/2 黒褐色砂質土
［盛土］	13	Hue10YR1.7/1 黒色粘質土
［旧表土］	14	Hue7.5YR2/3 極暗褐色粘質土
［地山］	Ⅰ	Hue10YR4/4 褐色粘質土

るように、最大 0.36ｍの厚さで堆積している。第 8 層は、調査区東端から西へ 1.08 ～ 4.1ｍの範囲にかけて、最大 0.5ｍの厚さで分厚く堆積する。この層は、墳丘側において厚く堆積し、調査区西端に近づくにつれて徐々に薄くなっている。第 9 層は、調査区東端から西へ 0.74 ～ 1.34ｍの範囲に堆積している。また、第 10 層は、調査区東端から西へ 0.94 ～ 1.52ｍの範囲に堆積している。両層は周溝内側斜面にかかる箇所にのみ認められた。第 11 層は、調査区東端から西へ 1.02 ～ 2.88ｍの範囲にかけて、約 0.16ｍの厚さで堆積している。この層は、周溝内側斜面の下端付近のみに認められた。

これら周溝埋土の第 5 ～ 11 層の堆積過程については、第 9 図の断面図のように、まず周溝内側斜面の箇所に、第 11 層や第 10 層に続いて第 9 層が墳丘側から流れ込んだ後、これまた墳丘側から流れ込んできた第 8 層が、墳丘側に厚く堆積したものと考えられる。そしてその後、第 7 層に続いて第 6 層と第 5 層が、水平に近い状況で堆積したと考えられる。また、このほか調査区西端において、第 7 層の下で、1㎜の明褐色土粒を 10％含む黒色粘質土の第 12 層が厚さ 0.06ｍで認められた。第 7 層と近似するが、明褐色土粒の含有量によって区別した。

周溝　周溝内側斜面の上端は、拡張区内において、調査区東端から西へ約 0.8ｍの箇所に位置する。この地点の標高は約 72.520ｍである。第 9 図の断面図では第 14 層が斜めに途切れる箇所にあたり、平面図では標高 72.500ｍの等高線の位置とほぼ一致する(1)。周溝内側斜面の下端は、調査区東端から西へ 1.92ｍのところに位置する。この地点の標高は 71.501ｍである。平面図では、標高 71.500ｍの等高線のわずかに西側に位置する。周溝内側斜面の傾斜角度は、上半部で約 30 度、下半部で約 60 ～ 70 度である。

調査区内においては周溝の外側斜面が検出されていないため、その正確な規模等は不明である。確認した範囲内では、周溝の幅は約 4.1ｍ、また最深部は調査区東端から西へ 3.58ｍの地点で、地表面からの深さ約 1.26ｍ、標高約 71.390ｍを測る。周溝の断面形は底部の平らな逆台形を呈している。

墳丘盛土　調査区東端から西へ0.68mまでの範囲で第13層を確認した。第13層は、旧表土と判断できる第14層の直上にあること、また第14層よりも墳丘側に位置すること、かつ第14層西側端部に見られる傾斜に沿って積まれているような様相が認められることなどから、墳丘盛土と判断した。第13層は、北壁断面図で標高72.630mの地点からはじまり、約30度の傾斜で、墳丘側へ向かって徐々に厚くなるように積まれている。

旧表土・漸移層　調査区東端から西へ0.8mまでの範囲で第14層を確認した。第14層は地山第Ⅰ層の直上に堆積しており、周溝内側斜面の上端のところで途切れて、周溝埋土にはかからないことなどから、旧表土と判断した。この第14層は墳丘側の調査区東端で厚く、周溝内側斜面上端の位置で斜めに途切れているのは、墳丘築造時にこの部分が削り出されて成形されたものと判断できる。また、北壁断面図のように、周溝内側斜面から第14層西端端部にかけての傾斜がほぼ揃っていることなどから、周溝内側斜面もこの一連の削り出しによって成形されたものと考えられる。

第2調査区において、調査時には漸移層が明確ではなかった。しかし、改めて東壁断面の写真を確認したところ、地山第Ⅰ層から約0.1mの上までにおいて、地山第Ⅰ層由来の褐色粘質土がわずかに混じる土層を、第14層の下半部で確認することができた。調査時には不明確であったため、断面図には表していないが、旧表土と地山第Ⅰ層の間に位置するとともに、地山由来の土が混じることから、これを漸移層にあたる土層と判断した。旧表土・漸移層と地山第Ⅰ層との境の標高は72.520～72.590mである。

遺物の出土状況　第2調査区からは土器片139点、陶器片1点、ガラス片1点、時代及び用途不明の鉄製品1点の合計142点が出土した。層位との関係は次のとおりである。

表土の第1層から、鉄製品1点と陶器片1点が出土した。また、第3層からガラス片1点が出土した。第4層からは甕又は壺の口縁部にあたる土器片1点が出土した。

第7層からは、甕の有段口縁部1点、高杯又は器台の口縁部と考えられる土器片1点、高杯脚部1点、器台脚部1点、高杯又は鉢の口縁部と考えられる土器片1点の他、器種不明の土器片2点が出土した。このうち、甕の有段口縁部と高杯又は器台の口縁部と考えられる土器片、高杯脚部の3点は調査区東端から西へ1.38mいった、サブトレンチの南壁断面、標高71.576mの地点からまとまって出土した。また、器台脚部は、調査区東端から西へ1.14mいった、同じくサブトレンチの南壁断面、標高71.550mの地点から出土した。第8層からは、甕の有段口縁部1点とそれに接合可能な土器片3点、高杯脚部1点が出土した。このうち、高杯脚部は、調査区東端から西へ2.03m、標高71.539mの地点から出土した。甕の有段口縁部は、調査区東端から西へ1.32mの地点において、周溝底面から出土した。第11層の周溝底面にあたる位置からは、壺の胴部にあたる土器片1点が出土した。　（永田峻一郎・髙橋浩二）

注

⑴ 標高72.500mの等高線は、北壁断面図及びサブトレンチ南壁断面における地山面の標高計測値から推定したものでるため、点線で表現した。

第 4 章　出土遺物

今回の調査では、第 1 調査区と第 2 調査区から合わせて土器片など 181 点の遺物が出土した。このうち、図化することができた 22 点を取り上げて説明する。3・4・8・14 ～ 21 は第 1 調査区、1・2・5 ～ 7・9 ～ 13・22 は第 2 調査区から出土したものである。

1 は、第 2 調査区第 8 層から出土した弥生土器または土師器の甕の口縁部から胴部である。口縁部復元径 18.0㎝、口縁部高さ 1.0㎝を測る。口縁部は有段口縁をなし、短く直立して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。頸部内面は鋭く屈曲する。外面には口縁部から頸部に横方向のナデ調整、肩部に右下がりのハケメ調整が施されている。内面には口縁部に横方向のナデ調整、肩部に右上がりのケズリ調整、また頸部から肩部にかけて部分的なハケメ調整が施される。色調は外面が淡橙色、内面が浅黄橙色を呈する。内外面の一部には明赤褐色の変色が見られる。胎土はやや粗く、1 ～ 2㎜程度の砂粒が含まれる。焼成は良好である。

2 は、第 2 調査区第 7 層から出土した弥生土器または土師器の甕の口縁部で、頸部において剥離している。口縁部の高さは 1.1㎝である。1 と同じく口縁部は有段口縁をなし、短く直立して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。内外面には横方向のナデ調整が施されている。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。外面には煤が付着している。胎土はやや粗く、1 ～ 2㎜程度の砂粒が若干含まれる。焼成は良好である。

3 は、第 1 調査区第 14 層から出土した弥生土器または土師器の壺ないし甕の口縁部である。口縁部復元径 8.8㎝、口縁部高さ 1.6㎝を測る。口縁部は有段口縁をなし、直線的に外傾して立ち上がる。口縁部外面には浅く擬凹線が施されている。口縁端部は丸くおさめる。内外面には横方向のナデ調整が施されている。色調は内外面ともに、にぶい黄色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

4 は、第 1 調査区第 16 層から出土した弥生土器または土師器の壺ないし甕の口縁部である。口縁部復元径 10.4㎝、口縁部高さ 1.6㎝を測る。口縁部は有段口縁をなし、やや外反して立ち上がる。口縁部外面には浅く擬凹線が施されている。口縁端部は丸くおさめる。内面には横方向のナデ調整が施されている。色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。外面の一部には浅黄橙色の変色が見られる。胎土は緻密である。焼成は良好である。

5 は、第 2 調査区第 4 層から出土した弥生土器または土師器の壺と考えられる口縁部である。口縁部復元径は 15.0㎝である。口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。内外面には横方向のミガキ調整が施されている。色調は内外面ともに明褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

6 は、第 2 調査区第 11 層から出土した弥生土器または土師器の壺の胴部である。球胴の胴部形態をなすものと推定される。外面と頸部内面には赤彩が施されている。外面には肩部に縦方向、胴部に横方向のミガキ調整が施されている。内面には胴部の粘土継ぎ目痕を挟んで縦方向に指頭圧痕が見られる。また、頸部付近と胴部にハケメ調整が施される。色調は外面が浅黄橙色、内面がにぶい橙色を呈する。胎土は緻密だが、1㎜以下の砂粒がわずかに含まれる。焼成は良好である。

7 は、第 2 調査区第 7 層から出土した弥生土器または土師器の高杯ないし器台の口縁部である。

口縁部復元径は 14.0㎝である。口縁部はやや外反しながら開く。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横方向のミガキ調整が施されている。色調は内外面ともに明褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

8 は、第 1 調査区第 14 層から出土した弥生土器の高杯の口縁部である。口縁部復元径 14.7㎝、口縁部高さ 4.5㎝を測る。口縁部は外反して開く。口縁端部は丸くおさめる。口縁部下端には内外面ともに段がつく。また、口縁部外面の段部下端には、擬凹線文を模した 5 条の沈線が認められる。内外面には横及び斜め方向のミガキ調整が施されている。色調は内外面ともに黄灰色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

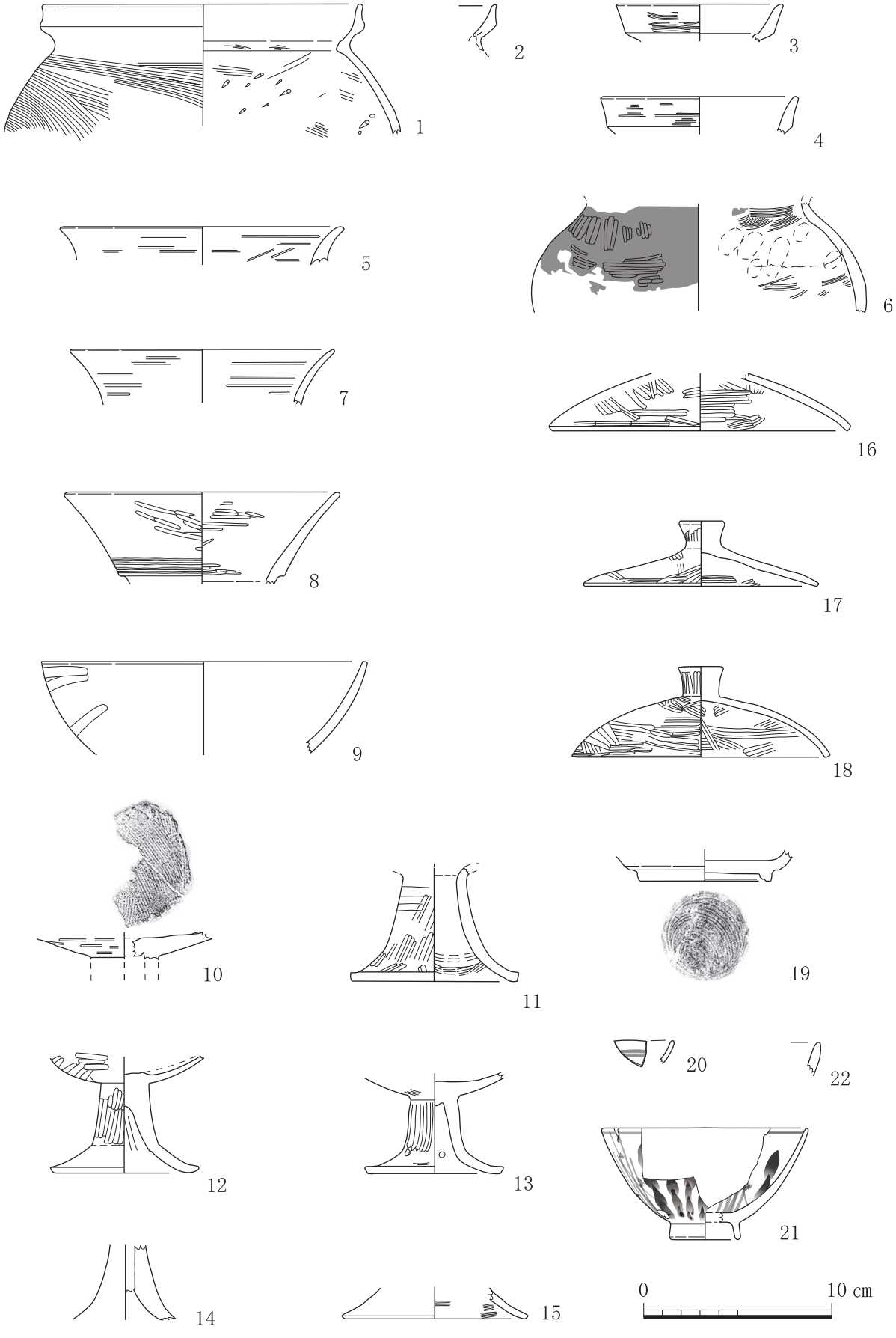
9 は、第 2 調査区第 7 層から出土した弥生土器または土師器の高杯または鉢と考えられる口縁部である。口縁部復元径は 17.0㎝である。口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は幅 0.2㎝の面をなす。外面には横方向と一部斜め方向のミガキ調整が施される。内面にも器面の平滑な状況から同じくミガキ調整が施されていると判断できるが、不明瞭である。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が橙色を呈する。口縁端部の内外面に赤褐色の変色が見られる。胎土は緻密である。焼成は良好である。

10 は、第 2 調査区第 7 層直上から出土した弥生土器または土師器の高杯の杯底部で、脚部との接合部分で割れている。外面には横方向のミガキ調整が施されている。内面には拓本のようにハケメ調整が認められる。また、このハケメ調整痕が残る部分は全体的に黒色化している。色調は外面が明黄褐色、内面が明褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は不良である。

11 は、第 2 調査区第 7 層において、サブトレンチ南壁の地山直上から横になって出土した弥生土器または土師器の器台脚部である。脚部高さ 5.6㎝、裾部径 9.0㎝を測る。脚部は裾部にかけてハの字状に開く。裾端部は幅 0.4㎝の面をなす。外面には部分的に赤彩痕が認められる。外面には上半部に横方向のナデ調整、裾部にハケメ調整後、右上がりの粗いミガキ調整が施される。内面には裾部に横方向の粗いハケメ調整が施される。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が浅黄橙色を呈する。胎土は粗く、直径 1 ～ 2㎜程度の砂粒が含まれる。焼成は良好である。

12 は、第 2 調査区第 7 層において、サブトレンチ南壁の地山直上から裾部を下にして出土した弥生土器または土師器の高杯の杯下半部から脚部である。脚部高さ 6.5㎝、裾部復元径 8.0㎝を測る。脚部は裾部にかけてハの字状に開く。裾端部は幅 0.2㎝の面をなす。外面には杯下半部に横及び斜め方向、脚柱状部に縦方向のミガキ調整が施されている。杯部内面は剥離及び風化がはげしく、調整不明である。また、脚柱状部の内面には、棒状の工具によると思われる縦方向の直線的な筋痕が見られる。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

13 は、第 2 調査区第 8 層から出土した弥生土器または土師器の高杯の杯下半部から脚部である。脚部高さ 4.5㎝、裾部復元径 8.0㎝を測る。脚部は裾部にかけてハの字状に開く。裾端部は幅 0.4㎝の面をなす。脚柱状部と裾部境目の 3 箇所に円孔が施されている。外面には杯下半部に斜め方向、脚柱状部に縦方向、裾部外面に横方向のいずれもミガキ調整が施されている。また、脚部内面にはナデ調整が施される。杯部内外面には煤が部分的に付着している。色調は内外面ともに橙色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。



第 10 図　出土遺物（縮尺 1/3）

14 は、第 1 調査区第 13 層から出土した弥生土器または土師器の高杯ないし器台の脚部である。裾部にかけてハの字状に開く。表面の風化が激しく、内外面ともに調整不明である。色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

15 は、第 1 調査区第 10 層から出土した弥生土器または土師器の高杯ないし器台の脚裾部である。裾部復元径は約 9.6㎝である。裾部はハの字状に開く。裾端部は丸くおさめる。内面には横方向のハケメ調整が施されている。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

16 は、第 1 調査区第 13 層から出土した弥生土器または土師器の蓋である。つまみ部は欠損している。体部はやや内湾して伸びる。口縁部復元径は 16.1㎝である。口縁端部は幅 0.15㎝の面をなす。内外面には横及び斜め方向のミガキ調整が施されている。色調は内外面ともに褐色を呈する。内外面の一部に黒褐色の変色が見られる。胎土は緻密である。焼成は良好である。

17 は、第 1 調査区第 16 層から出土した弥生土器または土師器の蓋である。つまみ部の頂部径は 2.3㎝、高さは 3.3㎝を測る。つまみ部の頂部は平坦である。体部は直線的に伸びる。口縁部復元径は 12.6㎝である。口縁端部は丸くおさめる。外面にはつまみ部に縦方向、体部に横及び斜め方向、口縁部に横方向のミガキ調整が施されている。内面には横及び斜め方向のミガキ調整が施される。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

18 は、第 1 調査区第 16 層において、周溝内側斜面下端の約 0.6m 北側から、ほぼ完形で、内面を上にし、斜めに傾いた状態で出土した弥生土器または土師器の蓋である。つまみ部の頂部径は 2.4㎝、高さは 4.85㎝を測る。つまみ部の頂部はほぼ平坦である。体部は内湾して伸びる。口縁部径は 13.8㎝である。口縁端部は幅 0.2㎝の面をなす。外面には同じくつまみ部に縦方向、体部に横及び斜め方向、口縁部に横方向のいずれもミガキ調整が施され、このうちつまみ部にはミガキ調整後に、横方向のナデ調整がなされている。内面には横及び斜め方向のミガキ調整が施される。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

19 は、第 1 調査区第 10 層から出土した須恵器の杯底部である。底部には、角状を呈する高台が付く。底部径は 6.8㎝である。内外面には回転ナデ調整が施される。底部には回転糸切り痕が認められる。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

20 は、第 1 調査区第 2 層から出土した磁器椀の口縁部である。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面には、やや太さの違う赤色の輪線が 2 条巡る。内外面ともに白磁に透明釉がかかる。胎土は緻密である。焼成は良好である。

21 は、第 1 調査区の第 1・2 層から出土した磁器椀である。口縁部径 10.9㎝、器高 5.0㎝、底部復元径 4.2㎝を測る。口縁部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には青藍色の輪線が 1 条巡る。口縁部から体部にかけては、草花文が同じく青藍色で染付されている。また、高台と体部の境目外面に青藍色の輪線が 1 条巡る。高台部底面を除いて、白磁に透明釉がかかる。胎土は緻密である。焼成は良好である。

22 は、第 2 調査区第 1 層から出土した陶器椀の口縁部である。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに黒褐色の釉が施されている。断面の色調は灰色を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。

（尾関さゆり・小山翔大・坂本美宥・下祐一朗・関杏介・永田峻一郎・髙橋浩二）

第5章　まとめ

第2次調査では、後方部北東側（第1調査区）及び北西側（第2調査区）の2箇所を対象として、周溝の存在を確認すること、また墳裾部を確認することで古墳の正確な規模を明らかにするための手がかりを得ること、そして築造時期決定の材料とするための土器資料を得ることなどを主な目的に、後方部においてはじめて発掘調査を実施した。杉谷1番塚古墳の発掘は、1974年の富山市教育委員会による調査から数えて実に45年ぶりのものである。

発掘の結果、両調査区とも墳裾部において周溝を確認した。周溝は、杉谷丘陵の基盤層の一つである褐色粘質土やにぶい黄橙色粘質土の地山を掘り込んで構築されている。周溝の内側斜面の立ち上がりは、上半部こそ約30度と比較的緩やかだが、下半部は約60～70度と急傾斜をなす。調査では、この周溝内側斜面の下端を墳裾とした。墳裾は、第1調査区では調査区南端から北へ約1.7m、標高約72.440mの地点、また第2調査区では調査区東端から西へ1.92m、標高71.501mの地点で確認された。後者の墳裾は約0.9m低い所に位置している。

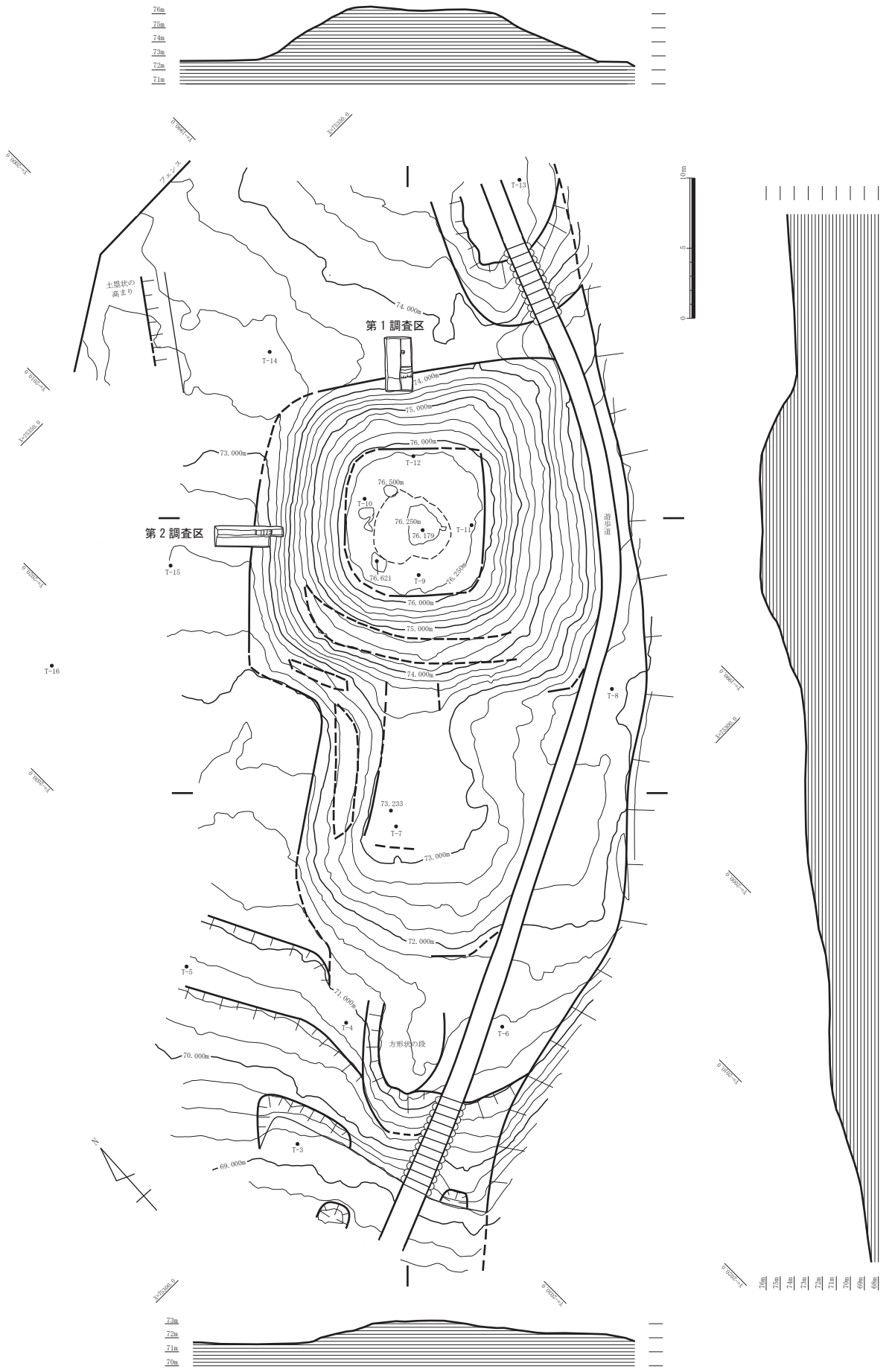
周溝の断面形は底部の平らな逆台形状を呈する。第1・第2調査区ともに周溝の外側斜面が未確認のため正確な規模は不明だが、確認した範囲内で、それぞれ幅約3.0m、約4.1mを測る。また、周溝最深部は、第1調査区で標高約72.400m、第2調査区で標高約71.390mで、より丘陵低位側にある後者では、周溝や墳裾が低い位置を巡っていることが分かった。

さらには、墳丘主軸上に設定した第1調査区の位置において墳裾を確認したことで、今後に墳丘規模を明らかにする手がかりを得ることができた。

また、両調査区とも墳丘側の位置には、地山の上に漸移層又はそれにあたる土層をはさんで旧表土が遺存し、さらにその直上で墳丘盛土と考えられる黒色粘質土の土層を確認した。この墳丘盛土にあたる土層は、第1調査区では標高73.600m、第2調査区では標高72.630mの地点からはじまり、ともに約30度の傾斜で、墳頂部側へ向かって徐々に厚くなるよう積まれている。このように、地山を掘り込むことで周溝とともに墳裾部を成形し、後方部の上半部には盛土を施して墳丘を構築していることが指摘できるようになった。

両調査区からは、周溝埋土を中心に合計181点の土器が出土した。これらの中には、北陸の弥生時代終末期に比定される「月影式土器」に特徴的な有段口縁の甕や壺、高杯、蓋などが見られる。ただし、これらが墳丘に伴うものかどうかなどについては明らかにできておらず、今後の検証が必要である。

杉谷1番塚古墳は、杉谷古墳群の中で唯一の前方後方（円）墳であり、隣接する60m級の前方後方墳である勅使塚古墳や王塚古墳に次ぐ規模をもつ。第2章第2節でふれたように、大型の四隅突出型墳丘墓である杉谷4号墳以降の墳墓の変遷や、杉谷古墳群における古墳の築造開始を考える上で、さらには勅使塚古墳や王塚古墳のような富山平野における60m級の前方後円（方）墳の出現過程を検討する上でも重要な意味をもつ古墳である。にもかかわらず、これまで十分な発掘が行われてきたわけではなかった。これら課題の解明へむけて、前方後方墳としての墳形や規模の確定とともに、詳細な築造時期が明らかになるよう、さらなる調査・研究のメスが入れられることを期待したい。（髙橋浩二）



第 11 図　杉谷 1 番塚古墳遺構全体図（縮尺 1/400）

図　　版

写真図版1

1　第 1 調査区設定状況（北東から）

2　第 1 調査区完掘状況（北東から）

3　第 1 調査区東壁断面（北西から）

4　第 1 調査区東壁南側断面（北西から）

5　第 1 調査区東壁断面墳裾部分拡大（北西から）

6　第 1 調査区南壁断面（北東から）

7　第 1 調査区西壁断面（南東から）

8　第 1 調査区旧表土検出状況（北東から）

9　第 1 調査区周溝底部ピット状遺構（北東から）

10　第 1 調査区蓋出土状況（北東から、第 10 図 18）

11　第 1 調査区須恵器出土状況（南西から、第 10 図 19）

12　第２調査区設定状況（北西から）

13　第２調査区完掘状況（北西から）

14　第２調査区北壁断面（西から）

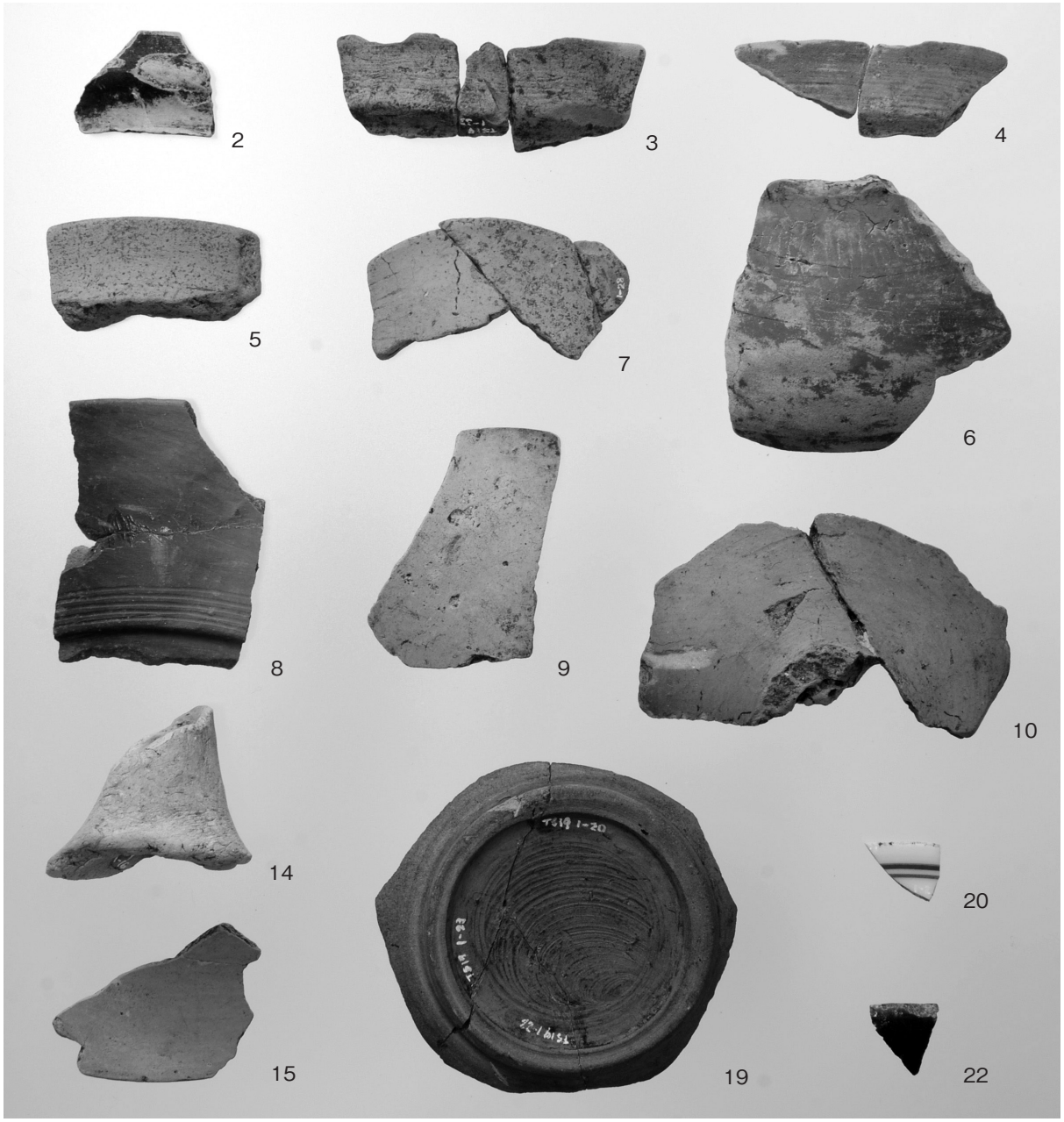
15　第２調査区北壁断面墳裾部分拡大（南西から）

16　第２調査区拡張区北壁断面（西から）

17　第２調査区拡張区東壁断面（北西から）

18　第２調査区甕出土状況（北から、第 10 図 1）

19　第２調査区器台脚部出土状況（北西から、第 10 図 11）



20　出土遺物

ふりがな	すぎたに1ばんづかこふん-だい2じちょうさほうこくしょ-
書名	杉谷1番塚古墳－第2次調査報告書－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	髙橋浩二（編）、尾関さゆり・小山翔大・坂本美宥・下祐一朗・関杏介・永田峻一郎
編集機関	富山大学人文学部考古学研究室
所在地	〒930-8555　富山県富山市五福3190　TEL 076（445）6195
発行年月日	2021年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
すぎたにいちばんづかこふん 杉谷1番塚古墳	とやまけんとやまし 富山県富山市 すぎたに 杉谷2630	36度 40分 44秒	137度 8分 37秒	20190728 ～20190902	14.75m^2	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉谷1番塚古墳	墳墓・古墳	弥生～古墳	前方後方墳	弥生土器・土師器、須恵器、陶器、磁器	富山市教育委員会が1974年に測量及び発掘調査した前方後方墳について、後方部における周溝や墳裾部の確認などを主な目的に、45年ぶりに発掘調査を実施した。 その結果、墳裾部で周溝を確認した。周溝の断面形は底部の平らな逆台形状を呈する。周溝の幅は、調査区内で約3.0～4.1mを測る。加えて、墳丘主軸上の第1調査区において墳裾を確認したことで、今後に墳丘規模を明らかにする手がかりを得ることができた。また、地山の上には漸移層をはさんで旧表土が遺存し、さらにその直上で墳丘盛土と考えられる土層を確認した。これにより、地山を掘り込むことで周溝とともに墳裾部を成形し、後方部の上半部には盛土を施して墳丘を構築していることが指摘できるようになった。 調査区からは、周溝埋土を中心に合計181点の土器が出土した。これらの中には、北陸の弥生時代終末期に比定される「月影式土器」に特徴的な有段口縁の甕や壺、高杯等が見られるが、墳丘に伴うものかどうかなどについては明らかにできておらず、今後の検証が必要である。

2021年3月19日印刷
2021年3月19日発行

杉谷1番塚古墳
－第2次調査報告書－

編集・発行　富山大学人文学部考古学研究室
〒930-8555　富山県富山市五福3190
℡076-445-6195

印　　刷　株式会社チューエツ